

四位五位は升で量るよ君が春子規

正月の遊びの最も盛なる者は東京にては遣羽子(およばねといふ)なるべし、遣羽子には主従のけじめもあらずお嬢さんもお三どんも白鼠も丈八も皆共に大道に出で、遣羽子す、羽子を受けそこなひたる者は罰を受く、其罰單に羽子板にて腰を叩かるゝに止まるなり、又男は顔へ白粉を塗られ女は顔へ墨を塗らるゝあり、いつかの意趣もこゝで現るゝことあるべし。

遣羽子や我墨つける君が顔子規

書初や羽子に負けたる君が顔同

遣羽子の終に負けたる娘かな同

猶あるべけれど略しつ。

附記

第十四號載する所の試問の答につきて鳴雪翁は異見ありとて一書を送られぬ、故に今此手紙を載せて諸君の参考に供す。

顔見せや曇らぬ鏡諸見物

愚意にては此曇らぬ鏡とは役者の顔を作るとき用ゆる鏡の事と思ふ役者は此鏡を頗る立派に拵へ申さば役者第一の道具とも稱すべきものなり今曇らぬ鏡とは役者の技藝を贊するの意にて顔見せは暗きより始まる故役者の部屋に數多の蠟燭を點し夫の鏡に相映し赫々たる夜千兩役者の規模も茲に在り此明にして曇らぬ鏡に寫せし顔見んとて諸見物は湊ふとの意ならん如何。

右鳴雪翁の説は何うも受け取り難し、此説にては「曇らぬ」の語、意味をなさず、

諸見物を多くの見物人と解するも穩ならぬやう覺ゆ。

顔 見 せ や 棧 敷 に と も す 嚴 島

是も夜芝居とせられしは無下に光景を損す前にも申如く顔見せは京阪に在ては昔は寅の一天位より始るものなれば舞臺も火を點し左右の棧敷も無論提灯等をともし連る其壯麗の夜嚴島に平相國の燈を献したるにも似たりとの意と存候如何。

顔見せなれば曉の光景をこそ取れ夜になりては其甲斐なし貌も見古るすべし小生も子供のとき(親が京の留守居なりしとき)夜の九時(今の十二時)より起て芝居に赴きし事を記憶す。

右の説につきて余は疑はしき事あれば書面を以て再び翁の説明を請ひぬ、其書の意は次の如し、「(略)馬琴の歳時記を見候に『又大阪にて夜芝居をなすことは寶永の頃嵐三右衛門といふ戯子、小夜嵐といふ狂言甚だ繁昌して見物夜中より群集し後には初夜より來りけるゆゑこれを嘉例として顔見せには夜芝居興行すとなん』とあり、これは大阪ばかりの事にや江戸も同じかりしにや伺ひ度候、私も顔見せの朝早く行く者といふ事は存じ居りしかど棧敷に灯をともすや否や知らざりし故夜芝居ならんかとおまかし置き申候次第にて既に棧敷に灯をともすと分りたらば夜芝居には關係なく候事勿論の儀に候』云々、右に對して翁が再度の書面來れり、曰く

(顔見せに付て夜芝居の一件)は小生其夜芝居と云ふが早くより始める意の夜芝居ならば毫も異存なし否小生は固より此意なればなり唯通例夜芝居と云へば最初より夜の興行を目的としてする芝居を云ふ夜なれば貴解の夜芝居が或は此謂ならんと察し夫では肝心の光景が損すべしと申たるなり然るに夜芝居の文字早くより始める芝居の稱にて寶永の古記にありとなれば小生は淺學を恥づるのみ併し今人に向ての解釋には今少し語を添へて早くより始まる

方の夜芝居なることを會得せしめ度は存するなり否らざれば顔見せと申光景見はれぬ恐あり此點は如何哉初夜より客が來るとは昔時の盛況想ふべし小生の如きも最前申上候如く夜半より起て參り候事は安政の頃京都に於ける事實なり今や世降り劇道の盛古に如かず小生をして夜芝居の稱の人に思惑違をなさしむる恐を抱かしむ可歎矣。

將又舊江戸に於ける夜芝居(早くより始める)の事御尋の處小生古記は知らず自己の實歴には左様の事なし高々六時位より始めしなるべし蓋し江戸の觀客は大名其他屋敷者過半なれば自ら門の出入にも關係し無闇に早くより始めても觀客を引くこと能はざりしなるべき歎要するに京攝は芝居一日の幕數甚多く江戸は之に反して一日の幕數少なし是も甲は夜より始むるを得乙は否らざるの致す所歎尙通客に御問合可彼下候畢竟するに小生は棧敷の灯を以て始めに屬する夜を照すものとすれば満足するなり終に屬する夜を照らすものとし

ては顔見せの光景に合はぬと申なり鎖々たる論もはや御掲載には不及最も御掲載下され候はゞ此意に御了得奉願候。

再按するに公の禁あり前後共夜に入らぬ様に定めしならんかとも存候夜に入れば自然姪猥の媒となる。

右の譯なれば必ずしも夜芝居に限らねば夜芝居といふことは取消す、只灯をともしたる夜は顔見せの日の朝に屬する者なることは疑を容れず。

里下の敷くを見て居る蒲團かな

是も愚意異なり敷くを見てゐる者は里下其人ならん我娘とは云へ貴人の館に奉公し珍敷く宿下せしことなれば親なども自然客あしらひとなし寢る蒲團をも敷て遣るを其自身も我内ながら何やらういゝしき心地し側に立て見て居ると云ふ意ならん此内に親々無量の愛と本人の久々我家へ歸りし嬉敷情も籠りて見ゆるなり。

右鳴雪翁の説正し、前に擧げたる余の答は誤れり、余の粗漏を謝す、燕子氏の説亦鳴雪翁の説と同じかりしやに覺ゆ。

虎の尾を踏みつゝ、裾に蒲團かな

虎の敷革と解する人多きより。とは小生不服なり。今時の人は易を讀まぬ故又多く漢文を讀まぬ故履の卦の故典を知らぬなり。知らぬ故に敷革より外に解釋出來ぬなり。夫を多數じや。迎重きを置かるゝは如何。但二説を比較して其趣敷革の方勝れりとの御判断は小生決して争はず候事。(尤小生は自説趣深しと信ず)

履虎尾と云て危険に臨むの意に用ゆることは漢文には常套の熟語古の書生ならば一讀して直に小生の説の如く取るなるべし。珍しと云ふ程の事に非ず。

右鳴雪翁の説正し、余の前に疑をはさみたるは今更に可笑しき心地す。

(自明治三十年七月至三十一年四月「ほととぎす」掲載)

第三篇 或 問

○或問一 切字とは如何なる者をいふか、切字は文法上の語にあらで意味の切る處をいふにやと覺ゆ、如何、

答 切字といふ事を詳に説明せんとすれば稍複雑に涉りて一口に言ひ難けれど、大體より言へば切字は文法上の終止言を指すといひて可なるべし、既に切字といひて「字」の字を置く上は字其者を指す語にて、意味と關係せず。

尾を引	げば	草に	取らるゝ	雉か	な	言	水
灯とも	せば	裏梅	がち	に見	ゆる	なり	曉
水仙に	炭あ	つか	ひし	手な	觸れ	そ	一
							晶

初雪に此小便は何奴ぞ。其角
 蚊帳を出て内に居ぬ身の夜は明けぬ。蕪村
 拾着て門の流れに臨みけり。蘭更
 雪は來でから風きほふ空凄し。會良
 花火盡きて美人は酒に身投げむ。几董
 雁鳴て菊屋のあるじの渡り候か。宗因
 糸遊に兒のまたゝきやさしさよ。白雄
 來た道は一つになつて尾花吹く。蝶夢
 蚊帳の中に螢はなしてア、樂や。蕪村
 の如きは切字が一句の最後に來る者にして最も簡單なる場合なり。
 葦割や。草刈。笛も夜は吹かず。保吉
 たれこめて祭見る家や。たき物す。几
 蕪村

行く年や親に白髪を隠しけり。越人
 夕顔や。秋はいろくのふくべかな。芭蕉
 去來去り移竹移りぬ。幾秋ぞ。蕪村
 冬近し時雨の雲もこゝよりぞ。同
 寒月や。古歌うたふ誰が子ぞ。同
 水仙や。百舌鳥の草莖花咲きぬ。同
 君行くや。柳緑に道長し。同
 霞みけり。比叡は近江のものならず。言水
 剃れ共に同じ暑さを凌ぐべし。素外
 別れ寒し。少し送れば又寒し。樽良
 の如きは一句中に切字二箇ありて一は中間に在り他は句尾に在る場合なり、之を
 文法上より言へば二文章を以て一俳句を構成する者なり、之を二段切といふ。

蟬暑し。はや蟬涼し。蟬悲し。心。祇
木も割らむ宿かせ雪の静かさよ。惟。然

の如きは一句中に切字三箇ありて二は中間にあり他は句尾にある場合なり、之を
文法上より言へば三文章を以て一俳句を構成する者なり、之を三段切といふ、此
の如き切字一句中に四箇ありとも五箇ありとも之を見出だすこといと易かり、さ
て

古池や。蛙飛びこむ水の音。芭蕉
辛崎の松は花より朧にて。同
奈良七重七堂伽藍八重櫻。同
朝顔に釣瓶取られても。らひ水。千代

の如き句の切字はと問はゞ古池の句には「や」の切字あり、他の句には切字無しと
答へん、「や」の一字を除きて外に終止言と見とむべき者即ち一文章の終を示すべ

き字無ければなり、併し一文章の終を示すべき字無ければ文章を成さぬかと問は
ば必ずしもさに非ず、文章の終を示すべき字即ち切字無くして完全なる文章を成
す場合二あり、一は獨立格の場合、他は切字の省略せられて居る場合なり、獨立
格の場合は、

菊作り。汝は菊の奴なり。蕪村
時鳥。櫻は袖に伐られけり。言水

の如く名詞を以て終りながら一文章を成す者なり、即ち前の句にて「菊作り」とい
ふ名詞は一文章を成し「時鳥」といふ名詞も亦た一文章を成す、故に此句は何段切
かと問はゞ二段切と答へん、されど切字はと問はゞ各句一箇宛（「なり」と「けり」
と）言はざるべからず、何となれば「菊作り」「時鳥」の如き名詞を切字と名づくべ
き由なければなり、又切字の省略せられて居る場合は俳句には極めて多く前に舉
げたる芭蕉の辛崎の句奈良の句及び千代の朝顔の句など皆此例なり、此等の句に

省略せられたる切字を試に表面に現さば、

辛崎の松は花より臙にて(あり) 芭蕉

奈良七重七堂伽藍八重櫻(あり) 同

朝顔に釣瓶取られて貰ひ水(を)する。 千代

の如き者なるべし、それはそれとして、

古池や蛙飛び込む水の音 芭蕉

の句の『水の音』といふは文法上の如何なる格かと問はゞ二様の解釋あるべし、一は之を獨立格とする者、他は『水の音』の下に『がする』といふが如き語の省略せられて居るとする者是なり、何れにしても此答に従はゞ此古池の句は『や』にて切れ又『水の音』にて切るゝ者故二段切といはざるべからず、されど古來の説は此の如き句を二段切とはいはぬやうなり、二段切とは俗宗匠の厭忌する者ながら古池の如き句法を惡しといひたる事を聞かず、即ち俗宗匠の二段切として嫌ふは切字の

二箇ある者(二段切の中の一部)に限るが如し、『切字二箇ある句』と『切字一箇にして二段切なる句』との差違如何といふに前者は切字の意味重く、後者は切字の意味輕き位の差あるべし、俗宗匠は此意の重き方即ち曲折のいちじるき句を信屈として嫌ふなり、殊に切字中にても、『や』『けり』『かな』などは著く強く切るゝ故最も『やかな』『やけり』を嫌ふにやあらん、されど俳句に強ち二段切三段切を嫌ふとはいはれ無き事なり、二段切三段切を用ゐたる方面白からば二段切三段切を用ゐべし、『やかな』『やけり』を用ゐて面白からば『やかな』『やけり』を用ゐべし。前にもいふ如く切字を見出だす事は易けれど切字なくして切れたる處を見出だす事は難し、そは種々に解釋し得べければなり、例へば

目には青葉山時鳥 初松魚素堂

の句は普通に三段切とする句なり、即ち三箇の切字は省略せられ居る者にて之を現せば、

目には青葉(を見る) (耳には)山時鳥(を聞く) (口には)初松魚(を食ふ) となる、されど強ひて之を一段切といはんとすれば言はれざるにもあらず、そは

目には青葉(を見、耳には)山時鳥(を聞き、口には)初松魚(を食ふ) と解釋するなり、又

やぶ入のまたいで過ぎぬ	凧の絲	蕪	村
飛びかはす矢竹心や	親雀	同	
夜泣する小家も過ぎぬ	鉢叩	同	
高燈籠晝はものうき柱かな		千	那
納豆汁必くる	隣あり	几	董

の如きは如何、一段切とすべきか、二段切とすべきか、「凧の絲」を獨立格と見做さば二段切となり「凧の絲」を「過ぎぬ」の目的格と見做さば一段切となる、「親雀」「鉢叩」の語を獨立格と見做せば二段切となり、上に置くべき主格を下に置きたる

者と見做さば一段切となる、「納豆汁」の語は文法上より言はゞ「くる」の目的格と見做し従つて此句を一段句となすに宜しけれど俳句上の趣味より初五にて切れたる者と見做されざるにもあらず。

此の如く詮義し來ればいづれとも付きかぬること夥しからん、そは寧ろ韻文の特色にして韻文の文法は散文の文法を以て規すべからざる者あるなり、此種々の變化せる場合を取りて解釋を試んとするは文法學の上よりいひて面白き仕事なれども美文的俳句の上よりいひて必要無きが如し、蓋し前に擧げたるが如き句の初五又は終五が獨立格と見做されたりとも見做されざりとも俳句の美に何等の關係も無ければなり。

古俳書には切字を説かざる者無し、今試に元祿十年刊本眞木柱(舉堂著)といふ書を挿いて見るに切字作例の部に變てこなる例を擧げたり、「かな」「けり」「らむ」「し」など其外種々の例を擧げて後に、

いかむ 目にいかむ心に見るは秋の風 西 武
いか 花に寝ていかなる事を鳥の夢 露 川

などあり、前の句はそれで善けれど後の句の『いかなる』といふ語は無論切字にあらず、『いかなる事(見る)』といふ動詞が省略せられ居る者にて即ち切字は現れ居らぬなり、同書に此次に『いかで』『なに』『なんと』『など』『どこ』『いつ』『いつち』『いつく』『いつら』『いつ』『いつづれ』『誰』『幾』『さぞ』『いざ』等の目を設け例句を擧げて切字としたるは『いか』の條と同じ誤なり、次に『下如』といふ一項を設け命令詞の例句を擧げ其終りに變例として、

見て後も今を戀ざらめかも祭 昌 維
戸叩くはたそかれ時の水雞なる 如 梅

の二句を擧げたり、後の句は宜しけれど前の句の『かも』は命令詞に非ず、又『二字切』といふ項の下に、

花ぞ笑ふ岩も物いへつくり庭 梅 盛

といふ句を擧げたり、『いへ』は切字なれども『ぞ』は切字に非ず『笑ふ』こそ切字なれ、或は思ふに『笑』は終止にも連體にも用うれど『は』は『ぞ』の係あるを以て『笑ふ』の終止言なることを證明すべしとの事か、さりとて『ぞ』を切字とするいはれやある、次に『三字切』の篇を置き、

いかに寝て何いふ事ぞ星の中 道 柯

の句を擧げたり、『いかに』も『何』も切字にあらざるは既に言へり、されど前のは説明の下手なる者とも見るを得べし、この『いかに』『何』『ぞ』の三切字ありといふに至りて誤謬も亦甚し、抱腹絶倒、(此句の切字は言ふ迄も無く『ぞ』の字一箇なり)次に『をまはし切字』といふ項を置きて、

青くてもあるべきものを唐からし 芭 蕉

といふ例を擧げたるは猶多少の理あり、此句は『青くてもあるべき者』を唐辛子(の

なましひに赤くなりたるよ」といふ意なれば「を」の字にて切るゝにあらねど「を
まはし」といへば聞えぬにもあらず、前の「いかに」なども「いかにまはし」と言は
ば幾何か善かるべきに、されど文法上より言はゞ「を」の字と切字とは何等の關係
をも有せず、只此種の「を」の字は句を曲折せしむる者故句に興味を生ずるなり、
著者は此趣味と切字とを混合したるが如し、次に「上に切字有て下を哉と留」とい
ふ項を置き、

月や見る菊には遅き給仕哉 鞭石
夕顔や秋はいろくのひさご哉 芭蕉
稻妻は棕櫚や芭蕉のそよぎ哉 巨海

の三句を挙げたるも噴飯的なり、初の句は「見る」が切字にて「や」は切字にあらず、
中の句は善し後の句の「や」は無論切字にあらず、此著者は何でも彼でも「や」の字
さへあれば切字と思ひたるにぞあらん、言語同断なり、又前の「二字切」の項の外

に此項を置きたるも不道理なり、次に「けり留」の項を置き、

松取りて常の朝日に成にけり 不角

といふ例あり、前の「切字作例」の項に「けり」の例句を挙げ今又こゝに此一項を設
けたるは如何、「に」の字に圈點を附したるは何か意味あるべけれど兎に角に此項
をこゝに置くべき理由無し、次に「三名切」の一項を置き「又三段切戸大離戸」と注
す、例句は

鬼は外「ふくは春風」年の内 貞徳

の一首なり、こゝに「三名切」といふは「三名詞切」の意とおほしく前の「三字切」と
は特に區別したるなり、即ち此句にては「鬼は外」にて切れ「ふくは春風」にて「年
の内」にて切るゝと解したる者にて正しき見解なり、只此見解を他の句に推し及ぼ
す能はざりしこそ愚なれ、次に「大廻」の項を設け、

「花咲かぬ身はなく計」犬櫻 元隣

の句を記す、大廻の語、理に合はず、前の三段切に對して二段切といふが適當なり、次に『玄妙切』の一項あり、例として

窓 白 し 雪 や 障 子 を 張 つ ら ん 盤 齊

の句を擧げたる心得ず、切りやうに玄妙も何も無し、此句は前の『二字切』の項にあたる者なり、『や』の字を切字と心得たるは例の誤なり、次に『切字面になき句』の例として擧げたる中に、

霞 より 時々 あ ま る 帆 か け 船 我 黒

の句あり、この『あまる』の語は連體とも見るべく又終止とも見るべし、併し此を連體と見なすが古來の習慣なり、終止としても強くは切れぬやうな心地ぞする、次に一つ置いて『三世のし』といふ項あり、それに『赤し』『近し』の類を現在とし『來るべし』『咲なまし』の類を未來とし『この現在未來の二は切字になるなり』とあるは善し、さて次に

『青かりし』『さりし』『見し』

これらの類いづれも過去なりきれ字にならず。

とあるは誤れり、過去の『し』といふからは『青かりき』『見き』と同じ意なるべく、それなれば切字なり、されど『青かりし蜜柑』『去りし妻』『見し月』といへば連體言にして無論切字に非ず、こゝの處説明不十分なり。

古俳書の切字などを論ずる誤謬多き事此類なり、後世の書は斯る大誤謬はなけれど猶拘りたる僻論多し。

要するに文法上より俳句を研究するは今日に於て猶面白き處あり、切字といふ方面より俳句を見るは殆ど其必要を知らず、蓋し昔は無學文盲の者に俳句を教んとしたりしかば勢ひかゝる事を説く必要もありけん、今の普通學を修めたる人に切字を教ふには及ばじ、然るに俗宗匠輩が鹿爪らしく切字を論ずるを聞きて何か深き意味でもあるかと疑ふ人あるは却て過ぎたるなり、切字など論ずるは愚の至り

なれど問はるゝ儘に何くれと書きつけ置きつ。

○或問二 俳書は如何なる書をば讀むべきか。

答 如何なる書にても讀むべし。一冊でも多く讀むに如かず。月並的俗俳書といへども大略其風體を心得置くべし。月並的俗俳書なりとて全く之を排斥して一句も讀まざらんには月並的俳書の何者たるを知らず、大なる考へ違ひをなすことあるべし。

されど若し博く讀むこと出來ずば善き本を選んで讀むべし。悪き本ばかりを讀みたらんには誰人にとて迷はざらんや。善き本といふは一口に言はゞ元祿の俳書と天明前後の俳書なり。元祿の俳書は多けれど七部集など中にも善かるべし。七部集とは冬日、春日、あら野、ひさご、猿蓑、炭俵、續猿蓑の七部を合せたるなり。(元祿の原版はそれぐ別々に時を違へて出たるなり)尤も冬日、春日、ひさごは小冊子にして俳句少し。芭蕉の心髓ともいふべきは猿蓑なり。猿蓑の句おとなし

くして上品で趣味が深くて言葉調子が善くとゝのふて幾度見ても飽かぬといふやうな代物多し。あら野は猿蓑よりも不器用に、炭俵は猿蓑よりも器用なり。共に讀むべし。あら野、猿蓑、炭俵と時代の順序に讀めば四五年間に起りたるいちじるしき變化を知るを得ん。續猿蓑には平凡なる句多し。されど元祿の平凡なる句は讀まざるべからず。七部集、佳は即ち佳なれどもこれだけにては元祿を盡さず。少くとも其角の著書の一二なりとも讀むべし。例へば續虚栗、花摘、末若葉、焦尾琴、錦繡緞の如し。其角以外にては其袋、卯辰、韻塞、皮籠摺、小弓誹諧集等其外にも善き集あらん。其角派の句は新奇を好み器用を弄ぶ處に於て七部集とは自ら變れり。七部とは誰が集めたるか知らねどおとなしきもの編纂の體裁のとのひたるものを集めれば其角の著書の自分勝手につくりたると對照せんはいと面白かるべし。

天明前後の書も多かれど蕪村七部集など最も宜し。蕪村七部の内にては續明烏、五

車反古殊に善き什を集めたり。太祇嘯山の編める新選も面白く、楞良の我庵集も平淡なる句風他に異なりて面白し。

因に云ふ嘯山の古選をもてはやす人あれど古選には悪句も極めて多く、殊に漢文評に至りては文字の拙きのみならず、いふこと少しも當らず。幼稚とも大幼稚の評なり。古選を読むは善けれど評を當てにすべからず。

各家の家集はつとめて之を読み善く味ふべし。家集には悪句多しとて手に取らぬ人あれどもそれは自ら其域に到らぬ者ぞ。大家の悪句は研究して大に益あり。例へば蕪村の集を見て『これは』と思ふ名句あるべし。又同じ集の中に『こんな』と思ふ悪句あるべし。其時其悪句に就きてよくよく考へて見よ。先づ第一に蕪村程の大家がなぜこんな悪句を作つたかと不審を起すべし。而して後に蕪村はどこをつかまえたかと考へ、自分にも此句が作れるだらうかと考へ、何處が悪いのだから考へ、悪い處を何う直したら善きかと考へ、いろ／＼さまざまに考へて見よ。必ず

發明する所多かるべし。そんな事して居る内に悪句が段々善くなるやうな事もあるべし。稍深く俳句に入らんとする者は家集を讀まざるべからず。家集の著名なる者左の如し。

芭蕉——泊船集。芭蕉句選。一葉集。芭蕉翁句集。(芭蕉翁句集は未だ見ず)

去來——去來發句集。

丈草——丈草發句集。

其角——五元集。五元集拾遺。其角發句集。

嵐雪——立峰集。

鬼貫——鬼貫句選。七車。

支考——支考發句集。(此書未だ見ず)

楞良——八瀬。

蕪村——蕪村句集。新花摘。

太祇——太祇句選。(此書未だ見ず)

几董——井華集。

蓼太——蓼太句集。(三編六冊あり)

白雄——白雄句集。

曉臺——曉臺句集。(未だ見ず)

闌更——闌更句集。(未だ見ず)

成美——成美句集。

道彦——薦?集。(未だ見ず)

士朗——枇杷園句集(四冊)。士朗叟發句集。

樗堂——萍窓集。樗堂句集。(樗堂句集は未だ見ず)

葛三——?(未だ見ず)

乙二——松窓句集。松窓句集拾遺。

一茶——一茶句集(二種あり)。俳人一茶。

嵐外——嵐外發句集。

此外北枝發句集、浪化上人發句集、麥林集、千代句集、蒼虬發句集、方圓叟句集なども間あらば見るべし。

准家集は五子稿、新五子稿、十家發句集、新十家發句集、三傑集杯善き者多し。類題の稍大部なるは類題發句集、新類題發句集、故人五百題、新題林發句集、(題林發句集といふ書ありや否や知らず)發句題叢(名所の部共に八冊)等なり。題叢は過半惡句なり。されど大部の書故抜き出せば佳句もあるなり。

因に云ふ、明治になりて翻刻又は編纂せられたる俳書(但し古句を集めたる者)は一葉集、七部集、故人五百題、蕪村句集(翻刻又は編纂等數種あり)俳人一茶、芭蕉全集、芭蕉以前俳諧集、其角全集、許六全集等なり。古俳書は坊間に乏しく到底之を求むる能はず。活字本は珍本を集めて値段の安き者多し。

俳書を求めんと欲する人は活字本を求むるに如かず。但し活字本には無数の誤字あることを承知し置くを要す。(自明治三十一年四月至六月「ほととぎす」掲載)

第四篇 随問随答

○第一問 『俳句新派の傾向』に『剛力の清水濁して去りにけり』の句を複雑の例として挙げあり。されど蕪村の句にも『鮓つけてやがて去にたる魚屋かな』などいへるあり。剛力の句を以て明治の特色といふべき複雑の例に擧ぐるは其當を得ずと思ふ。如何。

答 御尤なる質問なり。筆到らずして此疑を來したり。余は剛力の句が複雑の度に於て天明の總ての句に超越したりといふに非ず。清水の句の中にて同じ様な趣向の句を並べて其中で剛力の句が最も複雑したるを示したるなり。天明にも複雑なる句無きにあらねどそは或る部分に限られたり。然るを明治に至りては總て

の部分に於いて複雑になり行きたりといふ一例として清水を挙げたる者なり。

○第二問 『てゝれ千す竿のはづれや天の川』といふ句あり。てゝれとは何ぞ。

答 てゝれは憤鼻禪なるべし。

○第三問 きりぐすの句には古より或は蚊帳の釣手或は長押などに止りて鳴き、或は戸棚の中より飛び出すとか或は芒の穂先に鳴き居るなどいふ趣向あり。

されど余は斯る處を見つけたる事無し。地方によりては珍しからぬ事にや。承りたし。

答 今日東京にていふ「きりぐす」は色稍緑にして、形、蚤に似たり。余の郷里にては單に「ぎす」と稱ふ。今日東京にていふ「こほろぎ」は色黒くして小く、こほ室内にも飛び込み戸棚よりも飛び出す者なり。余の郷里にては之を「かまご」といふ。俳句にて「いとこ」といふも是なり。されど地方によりては東京の「きりぐす」を「こほろぎ」と稱へ、東京の「こほろぎ」を「きりぐす」と稱ふとぞ。古書に

在る「きりぐす」「こほろぎ」に就きても古來論あり。或は兩者同物異名なりといひ或は然らずといふ。要するに此事は十分にたしかならぬが如し。余の臆測する所にては、「きりぐす」は今日東京にいふ「きりぐす」の事なるべしと思ふ。何故といふに其啼聲が最も善く「きりぐす」といふに似たればなり。但昔いふ所の「こほろぎ」が同物なるか異物なるかは知るによしなし。されど其「きりぐす」は問者の問の如く、室内に來らぬは勿論、普通に聞かるべき者に非ず。それを俳句にて最も普通に詠み、且つ室内にもあるが如く詠むは、或は「こほろぎ」と誤りたるもあるべけれど多くは實際の「きりぐす」を詠むに非ずして、寧ろ「きりぐす」といふ語を「蟲の聲」といふと同じき意味に用ゐたるなり。さらば何故に「きりぐす」といふ語を「蟲の聲」といふが如き意に用ゐたりやといふに、そは初め歌にてしか用ゐたるに據れるなり。歌にてしか用ゐたる譯は、古今集以後には題詠盛りに行はれ、京都の公卿たちは實物を知らずして當推量に歌を詠みたる結果、

『きりぐす』の如きも何かは知らず只鳴く蟲の名として濫用せられたるなり。既に此の如くなる上に俳人とても兎角舊慣に泥みて實地を離れんとする傾向より此誤謬を來したる者なるべし。今後は『きりぐす』は『きりぐす』のやうに詠まれたき者なり。

○第四問 (略) 琴柱に膠する陋見を去り明治の俳壇に一革命を喚起せんとする貴派同人にして、

屠蘇臭くして酒に若かざる慣り

七草は薺はこべに何々ぞ

白き蝶黄なる蝶とばかりなり

涼しさうな處をよつて行き給へ

などの俳句有之如何に首を傾け想像を逞くして吟腸の影を追ひ意匠の跡を求むるも其趣味を解すること能はず、ある宗匠に問ひしにこれは俳句にあらずして之れ

をしも俳句と云はゞ活字的配置は悉く俳句と謂はざるべからず、との事に有之候。右は一句の表面に現はれたるだけの意義にして復他に意義なる者無之候や。もし然りとせば何處に詩美を感じたるかを疑はざるを得ず候。云々。

答 新派の句の可否を月並の宗匠に問ふとは氣の知れぬ事なり。問者は月並宗匠が『善い』といはざれば新派の句は善い者に非ずと断定すると見えたり。我々が宗匠に譽めらるゝ句を作るやうならば初めより新派とか何とか騒ぐに及ばぬ譯なり。何處に詩美を感じたるかは其句々々に現れ居るだけにて分るべし。何も『首を傾け想像を逞くして吟腸の影を追ひ意匠の跡を求む』などそんなにむづかしく考ふるに及ばず。新派の句を宗匠に聴く程の量見ならば、此句に限らずどの句を見ても分らぬ事必定なり。萬一、分つたりといふ句あらば其分つたといふ處は宗匠の譽める處にして却て新派の缺點とする處に相違あるまじ。問者の文中(こゝには掲げず)に歌論を引ききたるを思へば或は和歌臭味の人にはあらざるか。幼稚、

拙劣、陳腐、平凡、單調、粗漏、何とも彼とも申しやうなき和歌を、さも面白けに讀み、さも勿體らしく貴ぶ人ならば、趣味の多様な俳句の分らぬもことわりなり。「別れ居たる父母兄弟に逢ひし嬉しさなどは他をもあはれと思はずべくも」とは狭き量見見え透きて笑ふべし。そんな事は俳句にて言へもせぬが、縦し多少言ひ得たりとて、それは俳句に用うる材料の萬分の一にも當らぬ事なり。歌はそんな事より外に材料無きものと思へる故に陳腐になり了るとはお氣がつかれずや。焼芋を喰ふたうれしさも俳句になる、馬糞を踏んだきたなさも俳句になる、大概な事は言ひ様次第にて人を感じしむ可し。親兄弟に逢ふた嬉しさが無上の材料と思ふやうな狭い量見にては到底俳句の分る期はあるまじ。「何處に詩美を感じたか」て、教へ様も無けれど、先づ郊外に出で、けんく、蒲公英の花でも見給へ、それで分らずば木の芽をふかんとする林のけしきつくぐくと見給へ、若し其時、仰向いた顔へ糞が糞を落したら俳句はこゝなりと知り給へ。

○第五問 左の句の中にて何れが物になり候や。

人を見て犬吠え出すや 桃の里
知らぬ人に犬の吠ゆるや 桃の村
桃の村見知らぬ人に犬吠ゆる

答 いづれも句になり申さず。

商人を吠ゆる犬あり 桃の花 蕪村
といはゞ宜しからん。

○第六問 左の句は類句あるために落第せしや。又は趣味無きためや。

手習の師匠が墓や 土筆

答 斯様な駄洒落的の句を善きと思へるやうにては頼もしくらず。土の筆といふ縁にて手習といふ事を取り合すが如きは貞徳派の手段にして其品格の卑き事今更いふに及ばず。發音の掛け合せ、文字の掛け合せなどを捨て、趣味の上に配合

を求むべし。

○第七問 春季結足の句の中に足の字の見えざる者あり。如何。其例

此頃や 蹈心地よく 春の草
よき人の家の花見の宴かな
小謠や 櫻月夜の森のかけ
春百里 隈なく晴れぬ 立の山

答 これは選者の粗漏なるべし。

○第八問 腕掌等手にちなみある者を詠みこめば手といはずして可なるか。

答 掌は「手な底」「手な心」にして手なり。「うで」は「う手」にてはあらずやと思ひて取りたり。但し後の方はたしかならず。

○第九問 六號募集俳句の中に全く同じ句「戀猫の足をかまれて戻りけり」と申すが二つ有之、右は何故二句相並不申候て其間に二十七の等級をつけられ候哉。

答 募集俳句は等級的に並べたるに非ず。

○第十問 「戀猫の足をかまれて戻りけり」「戀猫の足をぬらして戻りけり」兩者孰れがまさり候哉。

答 「ぬらして」にては戀猫の趣寫らず。「春の人足をぬらして戻りけり」とでもいひ得べき趣向なり。「かまれて」といふ故に猫の趣にもなり、且つ戀と反照して面白きなり。

○第十一問 左の句は何故に選に漏れたるぞ。

妹が手に 更に 美し 櫻貝

答 「更に」が悪し。

○第十二問 俳句に「落し文」(夏季)といふ題有之候由に候へども其例を知らず候に付御示し被下度候。

答 知らず。

○第十三問 寂葉細みなどいふ俳諧上の通語を御説明下され度候。

答 世々の宗匠が思ひくゝに解して居るやうに思はれて何だか分らず。縦し分つたとしてそんな事はどうでも善きにあらずや。我々仲間では通語でも何でも無い。

○第十四問 日本新聞に子規子の句に

戸口出て左へ曲る燕かな

とあり。特に左といふは何か意味があるにや。

答 意味無し。右にても左にても善し。さらば意味無き者を何故に左と置きたりや、といふに、印象明瞭ならしむるためなり。只「戸口を出て曲る」といふよりも「左へ曲る」といへば、其處の光景、即ち燕が戸口迄來てそれより左の方へ曲る光景が、より明かに眼前に浮ぶべし。理論は此の如し。余の句は拙い句なり。

○第十五問 本誌第二卷第一號に四方太君の雑話と題せる文中「印象が明瞭でなければ餘情が無い風韻が無い實に餘情は明瞭の度に正比例して居る」云々と書い

てある。然るに一二年前日本新聞紙上にて何かの俳論の中にこれと正反對のやうな説のあつた事を記憶せり。其概説に印象明瞭にして餘情のある句は作し得ずと。又左の算式を載せて、

餘情	10	+	10	=	20
印象	9	+	11	=	20
	8	+	12	=	20
	7	+	13	=	20
	6	+	14	=	20
	5	+	15	=	20
	4	+	16	=	20
	3	+	17	=	20
	2	+	18	=	20
	1	+	19	=	20
	0	+	20	=	20

明瞭なる印象はなくとも餘情あれば句となり又餘情なくとも明瞭なる印象さへあれば完全の句となるやう、即ち印象明瞭と餘情と兩立せざるかに論ぜられたり。余は深く四方太君の説を信するものなれども尙大に疑を生ずる事あり。詳細なる解答を望む。

答 簡様な議論は多く定義の異同より衝突を生ずる者なり。問者は先づ餘情と

いふの事定義(或は實例)を示さざれば之を論ぜんに由なし。されど試に余の説を述べんか。(餘韻の定義は言ひ難くして、却て煩雜を來すの憂あれば實例によりていふべし)世上一般の人が餘韻といひ餘情といふ句を見るに、

夏草やつはものども夢の跡 芭蕉

の如きをいふが如し。故に余も此等の句によりて餘韻といふ事の定義を歸納的に定めたるなり。其結果は餘韻と印象明瞭とは反對に走るの傾向を認め得たるを以て質問中に記すが如き算式をも製したる次第なり。漢學家の用語法を見るも彼等が餘韻ありと評するは、明清の客觀的印象明瞭的詩文にあらずして漢魏六朝の主觀的印象不明瞭的詩文にあり。俳文にても餘韻と稱するは主觀的の者か。又は客觀にてもいくらかほんやりとしたる處を含む者なりと思ふ。即ち景色ならば空間の狭き景色には餘韻少く空間の廣き景色には餘韻多き傾向あり。例へば練瓦の壁又は板塀もて圍まれたる小庭は一草一石悉く眼を逃るゝ者なければ印象極めて明

瞭なれども、餘韻多しとはいはぬなり。之に反して郊外に出で、廣濶なる景色に對する時は、物々の印象は小庭の竹石の如く、明瞭ならざれども、餘韻は此方にあるといふを得べし。奥深き木立に對する時亦然り。今少しく理窟臭くいはんか。餘韻爛々といふは鐘を撞きたる後に響の長く残るが如き感じなれば多少時間を含みたる感じなり。主觀的の者は時間を含みたり。客觀的にても廣き空間、奥深き空間は一瞬時に看盡すこと能はざるを以て時間を含みたり。(俳句にては廣き空間は言ひ盡す能はざるにより、其言の盡さざる部分を想像するによりて時間的となる)此二者に餘韻多しといふは時間あるがためなり。印象明瞭なる小客觀も同じ光景を幾度か繰り返す事によりて時間的なるを得れども、それは「變化なき時間的」なるを以て餘韻に於ては缺くる所多し。余の餘韻といふは大略此の如き者なり。四方太子の所謂餘韻は廣く文學的美を指したるかと思はる。問者の意亦然るべし。若し餘韻といふ事をさう解したくばさう解するも勝手なり。但世人のいふ

所は余の説の如き傾向あるを信ず。定義によりて事實を誤る無くば文字は如何様
にても可なり。故に問者は常に空論によらずして實例による可し。

○第十六問 新派の句と月並の句との差別を明にせられたし。

答 新派の句と月並の句とを比較すれば自ら區別は明なり。其上にて若し不審あ
らば實例を擧げて質問す可し。

○第十七問 俳句の切字と文法上の終止言との區別を問ふ。

答 同じ事なり。

(二)

○第一問 「キリ、スとはコウロギの別は貴説の如くに信じ居候。併しながらキリ
、スは室内へ來らず、コウロギは室内へ來るとは吾田舎地方とは全く反對に候

キリ、スには羽ありて（即ち貴説の如くイナゴに似て色較綠にて方言ギースと
いふ）初秋夕方より朝迄鳴く者にして、夜間窓を明け行燈を照して裏口等にて涼
を取る時、燈火を慕ひて行燈に來りギーツチョン（故にハタオリともいふ）と
さも涼しさうに面白く鳴き、又は夜深けて人の靜まる時蚊帳にとまりても鳴くな
り」コウロギは美音は發すれども室内へは來らず。常に地中に潛み夜間出で、鳴
く。吾地方キリゴといふ。色は黒く、飛ぶといへども羽なくして僅に二三尺に過ぎ
ず。「チッキリカセーハタタテ〜」餅搗モチユツいちや酒を買ひ買ひ〜」といふが如き
口調を心に置いて聞けば殆ど斯くいふが如く聞ゆ。丈草の句に「夜寒にも穴には
鳴かずきりぐす」とはコウロギの事には非るか「此と同一種にてカマコとは形も
何も同じけれど色は灰白色にして人家の竈邊に棲み夜間は厨等に出で、食物を拾
ひ喰ひす。鳴聲はキチ〜〜といふのみにて更に面白からず」單に蟲の聲とい
ふは松蟲鈴蟲コウロギ等には非なるか。（石見國邑智郡田所村某）

答 問者の所謂キリ、スは東京にていふスイッチョ（又馬追ともいふ由）なるべし。此蟲ならば東京にても室内へ来るなり。其鳴聲は機織る音に似通ひたれば古來歌などにいふハタオリは是なるべしと余も思ふ。されど古のキリ、スが此蟲の事なりや否やは知らず。兎に角東京にていふキリ、スは此蟲に非るなり「問者の所謂カマゴは余が前號にいひしコホロギ即ちカマゴと符合せり。但灰白色といふはいかゞ」問者の所謂コウロギ即ちキリゴは東京にて何といふ蟲なるか知らず。余の郷里松山に於いて「テッキリ庖丁腰ニサーシテ、ヒョククリ、コックリ、ドコ往キ」と鳴く蟲ある由なれど、其名は今分らず。或は同じ蟲なるべし「單に蟲の聲といへば松蟲、鈴蟲、コホロギ、キリ、ス、馬追等何の事にでもなるなり」各地方にて蟲の名稱に就き著き相違あらば教へ給へ。（前號隨問隨答第三問參照）

○第二問 幸に高著、俳話、入門、大要等によりて俳諧の大道を悟了仕候へども其研究法は未だ十分に明解仕兼候。例之運座の方法、採點法并に課題、兼題、せ

り吟、採題等に就いて御教示相願ひ度候。

答 我々が普通に遣つて居る方法をいはゞ「運座とは、例へばこゝに十人會合したりとせよ。其時に狀袋十枚に一つづゝ題を書きて、それを一枚づゝ各人に配るなり。各人は自己が受け取りたる題に就きて一句を作り之を小紙片（普通に紙より用うる程の大きさの紙にて善し）に認め（自己の名は認めず）其狀袋の中に投ずべし。さて其狀袋の上には自己の名を小さく書き（これは句を入れたといふ印なり）右隣の人へ廻すなり。斯くして左隣の人より自己に廻し來る狀袋を見、其題に就きて又一句を投げ入れ前と同じく右へ廻す。各此の如く廻しつゝて十人皆十句宛作り終へたる時、狀袋の廻り止りの人が其中の句を引き出して別の半紙に淨書すべき義務あり。各淨書終りたらば座中の一人其句を一句づゝ朗讀すべし。朗讀中に自己の句の誤謬あるを知らば其淨書したる紙を乞ひ取りて誤を直す事を得。朗讀終らば其淨書一枚づゝ各人に配付し、并せて各人に總句數百句の中より十句

を選ぶ事を命ず。(自選を許さず) 各人は配付せられたる浄書の中より善しと思へる句を何句にても抜き之を別の紙に記し置く。検閲し終りたる浄書の端には自己の名を小さく認め之を右の方へ廻す。斯くして左より自己に廻り来りし浄書は直に之を閲して又善き句を書き抜き、之を右へ廻す。各十枚の浄書を一々閲し終りたらば、其時自己が書き抜き置きし句の中より更に十句を精選し別の紙に認むべし。さて各人の撰句を集めて座中の一人之を朗讀すれば其句の作者は自己の名を名乗るべし。點を記す人は各人の名乗るを聞いて點を記すなり。得點表の體裁は左の如し。

被評者	評者										點數	順番	
	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸			
甲	○											十五	2
乙		○										廿一	1
丙			○									八	7
丁				○								九	6
戊					○							六	8
己						○						五	9
庚							○					十一	4
辛								○				三	10
壬									○			十三	3
癸										○		九	5

各人の得點を報告し終ればそれにて一回の運座は終るなり。若し各句の得點を知らんと要するならば、初めに句を淨書したる者を手のあきたる人に配付し置き、撰句朗讀の際、其撰ばれたる句の上に點を記し行くなり又撰句中にて特に天地人三座を定めたる場合には得點表へ圈點を記す代りに天又は地又は人と記すべし。天地人も點數の算用には一點として加はるのみなれど同點者ある時は天地人の多き方を勝とす。我々は會合人の十人以上ある時も以下の時も、いつも十題出すを普通とし。猶便宜によりて變更するなり。以上は衆議判の運座にて特に我々が行ひ居る者、此外にも多少變りたる方法はいくらもあり。撰者を一人と定め置く場合などは甚だ異なれり「一題十句は題を一つ出して其題にて十句作るなり。之を小紙片に書き淨書し撰抜き點を記す方法は運座の時と同じ。若し四人以下なる時は初めより自己の十句を半紙一枚に列記し互に見せ合ふに止まる。此一題十句を作る時は多く三十分乃至一時間を限るを常とす。若し此時間内に出來ざる者は一句に

ても二句にても出來ざるだけを抛棄するなり「せり吟は句數を限らず時間のみを限る。例へば三十分と限らば其時間内にて何十何百句を作るも勝手なり。其句を小紙片に書き淨書し撰抜き點を附する方法は運座及び一題十句と同じ。其四人以下なる時は亦一題十句の場合と同じ。題は一つ出し置くとともに數多出し置くとともに宜しきに従ふべし。以上總て撰句の數は總句數の十分の一と定む「探題は小紙片に一々異なる題を記して其紙をひねり、各其ひねりを取りて其中に記しある題を詠むなり。これは見せあふのみにて勝負を決するに非ず「兼題宿題とは即坐に題を出して作るにあらず、兼ねてより題を出し置きて作るなり。斯くして作りたる者を、皆々會合して運座の如く點を附くるか、又は稿本に綴りてそれを廻送して點を附くるか、或は只見せあふに止むるか、いづれにても宜しきに従ふべし「課題とは即席にても宿題にても題を定めてそを作らしむる事なり「右何れの場合にても互に句に就きて可否を評論するは極めて有益なり。自己が夜景の積りにて作りし句

を人は晝間の景とする事あり。自己は女の事をいひたる積りなるに人は男の事とする事あり。さういふ場合につくぐと考へ見なば自己の思想が十分に句に現れ居らざる事を發明する事少からず。自己が作りて自己一人で褒めて居てはいつまでも進歩せざるべし、さりとして冷罵冷笑せよとはあらず。成るべく精密に批評し駁撃し相互の衝突點を見出だすを要す。但し點を附くる場合には得點表の成績を報告して後に批評に取り掛るを可とす。

○第三問 貴誌募集俳句は課題を以て主と致さず唯配合物となすもかまはず候や。

答 かまはず。

○第四問 ほととぎす俳句分類中

足 跡 に 潦 程 汐 干 か な

といふ句あり。「潦」は何と讀み何の意味なりや。

答 潦は「にはたつみ」と讀む。「にはたつみ」とは雨の降つた時に路上の凹みに出來る水溜りをいふ。

○第五問 新年のほととぎすに子規氏の句「女王祿やねびまさりたる御笑顔」といふが有之候。「女王祿」とは如何なる者に候や。

答 公事根源に、給女王祿、正月八日、參議辨史などむかひて承明門の内の西の座にて女王に祿を賜ふことあり、昔は王四百廿九人、女王二百六十二人と定められて年毎に今日祿を賜ひけるとかや、女王祿と字には書きたれど只王祿とばかり讀みて女の字を略するを口傳とはするなり、とあり。俳諧歳時記に、女王祿、正月八日これは女王に祿を賜ふことなり、其祿法、人別に絹二疋綿六屯とあり、江次第等に委し、云々、とあり。

○第六問 俳諧十家類題集(寛政未歲)は善き本に候や。

答 此本、余は見た事無けれど、十家といふは多く大家なれば悪き事はあるまじ。

○第七問 俳句には新暦を用うべきにや、舊暦を用うべきにや。

答 此問分明ならず。如何なる事又は場合をいへるにや、更に審に記すべし。

○第八問 俳句にては蜻蛉は秋季に入れられたれど實際は夏季なりと思はるゝなり。唯赤蜻蛉は秋季なり。如何に候や。

答 季の定めには多少の無理あり。蜻蛉に夏季の感強からば夏季に詠みて何の悪き事かあらん。されど古來久しく秋と定め來りし者なれば秋として置くも便利なる事あり。いづれにても好きな方を取るべし。

○第九問 夏季に雷の題無きは如何。

答 夕立が夏なれば虹も雷も夏季と定めて不都合はあるまじと思ふ。

○第十問 貴誌第二巻第七號、東京俳句界の中に『小芝居の幟濡れけり春の雨』といふ子規先生の句有之候。初めは誠に面白きやう思ひ候處、よくよく考へて見れば實際あり得べからざる事と存候。雨中には幟は取り入れて竿ばかり濡れ居るが

實景と存候。併し幟と雨との配合は面白ければ理想的にあるとして詠みたるにや、斯る事は不都合無きか、御伺申上候。

答 斯る場合もあるべしと思ひて作りしなり。

○第十一問 毎日新聞募集俳句、竹冷宗匠撰、秀逸の吟中に左の句あり。

こ　れ　が　皆　花　の　雫　か　吉　野　川
 春　風　や　四　五　寸　水　の　上　を　吹　く
 春　風　や　馬　上　の　僧　の　物　を　食　ふ
 小　半　日　蝶　と　舞　ひ　け　り　芝　の　上
 管　絃　や　落　花　亂　る　、　幕　の　内

以上五句の中第一句は評する迄もなからんが其他の句は秀逸の價值ありや否や。善惡とも細評を煩す。

答 水の上四五寸などいふは細工に落ちて面白からず。第三句は『餅を喰ふ馬上

の僧や春の風」と置きかへた方面白からんか。第四句解し難し。第五句は五句中にてひとり難無き者か。

○第十二問 何々宗匠といふこと何年に起り如何なるいはれなりや。

答 知らず。貞徳に花の本の稱を賜ふといふ事あり。されど『花の本宗匠』といひしや否や知らず。宗祇に花の本宗匠の稱ある事、何かにありたりと覺ゆれど、此事甚だ疑はし。芭蕉にも天保年間に花の本宗匠を贈りたりとか。もと宗匠といふは漢語にて、一代の宗匠などいへり。天下第一の人といふ程の尊敬語なり。それを學位などの如く用る初めたるは何時か知らねど、恐らくは花の本の下に宗匠を加へたるが其嚆矢なるべし。されば同時に二人の宗匠は無く、且つ私に稱へしにあらで公より賜はりしなり。貞徳死して貞室に二世の花の下を譲り、貞室死して貞恕に三世花の本を譲りしなどいふも疑はし。元祿には猶宗匠といふ言葉行はれざりしにや。俳家奇人談、馬場存義の傳に、宗匠の夜の雨といふ事あり。此頃

は一般に俳諧師の先生を宗匠といひたりと見ゆ。(存義は天明の初に歿したる人なり)他日詳細を知るを得ば再び答ふべし。

○第十三問 第二巻第七號、香墨君の句に

小刀を見失ひたる 接木かな

支考の句に

小刀のそれから見えぬ接木かな

右等類と見えたり。如何。

答 等類なり。

○第十四問 『松島やあゝ松島や松島や』右作者の芭蕉たるや其角たるやは吾等要無し。只擬ふ俳句としての眞價值ありや否や。

答 箸にも棒にもかゝらぬ句なり。芭蕉其角の作に非ること論無し。

○第十五問 左の二句何れが完全なりや。

月影の御簾透すや梨の花
梨咲えて月や、澄めり笛を聞く

答 何れも完全ならず。「影」の字無用なり。「透す」の意さだかならず。「や、澄めり」といふは春月の形容と受け取れず。序にいふ、「咲えて」は「咲いて」と書くべし。

○第十六問 寫生の句作を學ばんと、鉛筆と手帳を携へ、野外散歩を試るに「大要」にもあるが如く、景廣きに過ぎてつかまへ處なく、たとへば竹藪の中に椿の盛なるを見て、

竹藪の中に椿の盛かな

とか、又は田の中に捨てられたるまゝ大根の花咲きたるを、

大根の捨てられしまゝ花咲きぬ

とか、或は田の中に枯笹枯木等並びたるを、

所々枯笹見ゆる冬田かな

○ひよろくと枯木の並ぶ田面かな
など試るに一も意に満たず。終に倦みて歸る事幾度なるを知らず。斯道に志してよりこゝに一歳少しも上達の跡見えす。如何せば美の焦點を觀破するを得るか。願くは高教を垂れよ。

答 寫生に往きたらばそこらにある事物、大小遠近盡く詠み込むの覺期なかるへからず。大きな景色に對して二句や三句位をやうくひねくり出すやうにては逆も埒あかぬなり。大きな景色に持て餘さばうつつ向いて足もとを見るべし。足もとに萌ゆる草、咲く花を一つ一つに詠まば十句や二十句は立處に出来るわけなり。蒲公英あらば蒲公英を詠め。嫁菜あらば嫁菜を詠め。麥島あらば青麥を詠め。豆の花咲き居らば豆の花を詠め。畑打つ人を見つけたら畑打を詠め。芽をふく樹を見つけたら木の芽を詠め。霞んで居たら霞を詠め。うらゝかな天氣であつたら、

うらゝかやと遣るべし。日永、長閑、暮春、夏近、桃花、楊柳、摘草、踏青、燕、孕雀、材料は捨てる程にぶらついて居るなり。そんなに澤山ある材料を等閑に見過し、やうく藪の中の椿を見つけて、これより外に善き材料は無いと思ふ事いと狭き量見なり。縦し又竹藪の中の椿を見つけてそれを句に作るにしても「竹藪の中に椿の盛かな」などへたら長く作りては新趣向を入れる餘地が無くなるべし。此だけの事は「藪の椿」といふ六字にて聞ゆる故其外の十一字に其外の趣向を入れて趣を拵えるが肝心なり。又枯笹立てたるは畠にして、冬田にあらず、枯木の並びたるは田の畔にして、田面にあらず。それ位の事は少し注意すれば分る事なり。今年寫生の修行して見給へ。その時に猶分らずば再び問ひ給へ。修行して進歩せぬ譯は無き事なり。

○第十七問 子規氏撰は多く最負的のやうに思はれ候へども他に全く撰に入る句の少きものにや。

答 余の撰が最負無しの撰なり。外の人の撰こそ、諸君を最負して、直したり、作りかへたりして、成るべく澤山に取るなれ。余の撰は横着なる残酷なる撰なり。外の人の撰は親切なる最負的なる撰なり。

(二)

○第一問 俳諧大要第一期古句批評の處に於いて雅俗の別を辯ぜられたれども未だ合點し得ぬ處有之候間猶雅俗其ものゝ解説より始めて何故に此等各例が該當するかを一層精細に御教示を願上候。

答 雅俗といふは感情的に辨別するものにして智識的に辨別するものに非ざれば實例に就いて云ふ外は紙上にては論じ難し、實例に就いて説明したるものを見て猶解し難くば最早説明する由なし。譬へば醬油は辛く砂糖は甘しと云ふも猶ほ辛

さと甘さを區別する能はざる人には最早説明の道なきが如し。

○第二問 左に記す蕪村の句の内にて附圈の處を説明ありたし。

青 梅 や 捧 心 の 人 垣 を 問
 打 は た す 梵 倫 つ れ 立 て 夏 野 か な
 奈 良 坂 や 當 飯 は た け の 花 一 木
 負 腹 の 守 敏 も 降 ら す 早 か な
 卯 の 花 や 貴 布 禰 の 神 女 の 練 の 袖
 山 蟻 の 覆 道 造 る 牡 丹 か な
 ほ う た ん や し ろ が ね の 猫 こ か ね の 蝶
 山 彦 の 南 は い づ ち 春 の 宵
 お そ の 住 水 も 田 に 引 く 早 苗 か な
 蘭 夕 狐 の く れ し 奇 楠 を 炷 む

答 捧心とは西施の古事にて胸をおさへる事なり。西施少し病みて胸をおさへたる處を西施捧心といへり。此句は只女の事にして西施にはあらず。梵倫は普通に梵論と書く又は暮露ともかく。「ほろ」と讀むなり。虛無僧の事なり。昔はほろほろといふ。ほろ／＼の果し合をなすこと徒然草に見えたり。此句も同書の事實より思付きたるならん。當飯は「たうき」とよむ。草の名なり。和名なりや知らず。守敏は古代の僧にて弘法と競争せし人なり。俗書弘法大師の傳によるに、

天長元年仲春の頃天下大に日でりす公家 勅を下され大師をして雨をいのらしめむとす爰に守敏大德奏し申て曰く守敏眞言を學して同く御願をつとむ我すでに上臈たり先うけたまはりて行ふべしとこれによりて守敏に仰て祈らしむるに七日のうち雨くだると雖纔かに京中をうるほしていまだ山外に及ぶ事なしかさねて大師をして神泉苑にして請雨經の法を修せられしに七日の間雨ふらず大師怪をなして定に入て見給ふに守敏呪力を以て諸龍を水瓶の内に

かりこめたり但北天竺の境無熱池の中に龍王あり守敏か鈎召にもれたりと御覽じて公家に申うけて修法二ヶ日をのべられしに(略)鬚鬚として甘雨まさに滂沱たり池水湧みちて大壇の上にしたれり三日の間洪雨しばしくふりて普天の下に炎旱ながく休ぬ上一人より下四元にいたるまで首をたれ掌を合せざるはなし眞言の道あがめらるゝ事これより彌よさかりなり。

とあり。雨乞の競争に守敏は負けたれども猶少しは雨の降りたることを此句に云へるにや。練の袖はねり絹にてつくりし衣の袖なり。覆道は複道とかくべきを蕪村の誤りたるものなり。複道とは家から家にかけてる廊下の如きものにて阿房宮に長き複道をつくりし事古書に見えたり。此句にて複道といへるは何の事か解し難けれど兎に角に牡丹の華美なるに對して此の如き形容を用ひしなり。こがねの蝶は黄色の蝶なり。いづちとは何處といふに同じ。おそは瀬(をそ)のことなり。蘭夕とは「らん、ゆふべ」とよむ。蘭の花の咲きし夏の事なり。奇楠は「きやら」と

よむ。伽羅に同じ。

○第三問 芭蕉の

笠島やいづこ五月のぬかり道
と詠みし笠島とは何處なりや。蕪村の

旅人よ笠島語れ雨の月
も同じ處なりや。

答 笠島は陸前の國名取郡にあり。岩沼より一里許りなり。實方中將の墓の跡いまでも僅かに残れり。蕪村のも同じ處なるべし。

○第四問 嵐雪の黒茶碗とはいかなることによ。

答 立峰集に

茶碗銘

黒茶碗あり花の朝はますくくろく雪の夕はいよく黒し月待宵のやみを

さくり闇夜に鼻をとられしはおのくつちめくらのましはりなるべし。

検校 貧僧 大黒 小くろ

はちの子 早ふぬ 小雲雀

三代目をのんこといふのむこそ猶ふかき意味あれ秘してしはらく残す

松むしのりんともいはす黒茶碗

とあり。松むしといふ茶碗いまでも雪中庵に傳はる由。

○第五問 ほととぎす五號五丁に

芭蕉をとめて

我宿は蚊の小さきを馳走かな 秋の坊

とあり。而し此の句は秋の坊の句にあらず。却て芭蕉の句なりときく。いかゞにや。

答 小文庫に

我宿は蚊の小さきを馳走なり はせを

とあり。芭蕉の句なること疑なし。秋の坊とかきしはある本の誤を其儘に用ひしものなればこゝに正誤す。

○第六問 俳諧大要四十三丁(翻刻本にては二十八頁なり)に

野の宮の鳥居に薦もなかりけり 涼 菟

とあり。此句も涼菟にあらず芭蕉の句なりときく。いかゞにや。

答 元祿出版の皮籠摺(涼菟編)といふ書に涼菟の句として出でたれば涼菟の句たること間違なかるべし。芭蕉の句撰などが却て誤りたるものならん。

○第七問 芭蕉の句に

奈良にて

阿古久會の心は知らす梅の花

とある阿古久會とはいかなる意味にや。又蕪村の

阿古久會の差貫ふるふ落花かな
とある阿古久會も同一のものにや。

答 紀貫之の幼名を内教坊阿古屎アコククと云へり。芭蕉の句は貫之の「人はいさ心も知らず」といへる歌によりて作れるなり。蕪村のも貫之なるべし。併し疑はしきは阿古久會といふが固有名詞なりや否やといふことなり。阿古は吾子の意にて人の子をいへる詞、亦久會はこそといひて敬語に用ふ。後世にて殿といへるが如し。源氏物語に老女の若き女を呼ぶに「くそたち」といへる處あり。亦雀こそといひて雀殿の意に用ひたる俊頼の歌もあり。
是等を併せ考ふるに内教坊阿古屎とは内教坊の若様と云ふが如き意味にあらざるか。事の序に記し置くなり。

○第八問 蕪村には往々何々顔なる句あり。是は芭蕉の
菜畑に花見顔なる雀かな

の句調によりたるものにや。芭蕉以前にも此種の語ありや。
答 何々顔といふこと古き詞なり。其一例を擧ぐれば源氏物語紅葉賀にも、
かざしの紅葉いたうちりすきてかほのにはひにけおされたるこゝちすればお
まへなるきくををりて左大將さしかへ給ふ日くれかゝるほどに氣色ばかりう
ちしぐれて空のけしきさへみしりがほなるに、
とある類なり。

○第九問 擬人法は如何なる場合に悪しきや例を擧げて御説明下されたく候。
答 かゝる問は問ひ易くして答へ難し。只大方の場合に悪しと答へ置くべし。

○第十問 太祇の句に、
婆つれし爺も來にけり二の替
と云ふがあり、二の替とは如何なる事に候や。
答 二の替とは初芝居の次の芝居なり。

○第十一問 嘗て日本紙上に於て見たる句に、

離愁とは土筆の如きものなるか

と云ふ句あり、其意御説明下されたく候。

答 離愁とは土筆の如きものなるかと云ふ意味なり。外に説明の仕様なし。

○第十二問

新宅祝

交りは安火を贈り祝ひけり 碧梧桐

と云ふがありたり。此安火とは如何なるものにや、又和歌などには新宅の祝ひに假令如何なる意味を持てるにしろ、火と云ふ字を忌む事甚だし。俳句には差支なきや。

答 安火は東京語にて『あんか』といふ。木の箱の様なもの、中に火を入れて手をあぶるものなり。歌にても火の字を忌むなどと云ふ定めはなし。只御幣擔の連中

が御幣を擔ぐに過ぎず。俳句にても同じことなり。

○第十三問

奈良は鹿の鳴かざるを見て戻りけり

これは奈良に行つた所が鹿の鳴かざりし故に戻りしと云ふ意なりや。若しさすれば『奈良は鹿の云々』といひては意通ぜざる如し。

答 鳴かざりしが故に戻りしに非ず。奈良では鹿を見て歸つて來たといふ意味なり。鹿は見たれど鳴聲は聞かざりし故に鳴かざるを見てと云へり。

○第十四問 左の句の上五文字は何と讀むにや、

古禿倉もとより神の留守にして

答 『ふるほくら』と讀むなり。

○第十五問 俳句には係結の誤りしが多し。中にも動詞自他の誤は殊に多き様覺ゆ。文法は何か事ありて用ひぬにや。又は文法などは究むる者なきにや。

答 韻文は各國とも文法はづれの事多し。日本の和歌の文法に束縛せられし事は和歌の發達せざりし一原因と思はる。俳句は文法に係らず作りたるが故に和歌よりも發達速なりき。かく文法を破るはそれが爲めに文學上の妙味を顯はすに都合よき處に用ひらるゝ者なり。殊に自他の誤り居る處などは多くは俳句の面白き處なり。且文法なるものは一定不動のものなりとは思はず。何百年來俳句に用ひ來りし一種の文法は之を襲用して差支なかるべし。但し其法を知らずして文法違ひを成すものは此限りにあらず。

○第十六問 第七號に出て居る

大砲のどろくとなる木の芽かな

と云ふ句の大砲と木の芽との調和がどうも分りませんが御解釋を願ひます。

答 調和は説明の仕様なし。

○第十七問

朝顔の花や上野の山かつら

山かつらと云ふはいかなる所より出で、いかなる意味なりや。

答 山かつらの出處は知らず。意味は山にかゝつて居る曉の横雲の事なり。

○第十八問

武士の紅葉にこりす女とは秋色女

右の句意御詳解を乞ふ。

答 謠曲紅葉狩に維茂が鬼女にたぶらかされたることあり。此句は其事を云ひて男の好色を誡めたるものならん。

○第十九問 俳句と詩歌とは其趣味を異にすと云ふ事は兼て聞く所なるが俳句には必ず季を詠み込みあり。初心者の考にては俳句も詩歌の如く送別は送別の意丈を顯はし名所は名所の景丈を顯はさば強ひて季を詠まざるも可なるか如し。いかにや。

答 雑の句即無季の句を作るは勝手次第なり。俳句に之を禁じたるにあらず、然れども實際に於て俳人の雑の句を作ることも多からざるは面白く出来ぬが爲めなり。

○第二十問 俳句に四季の節序を分ち花は春、月は秋と区分しあれども中には不適當のものあり、梅は春と定めあれども寧ろ冬ならんか。落葉山茶花の如き亦秋の部に屬すべきものならん。且今日に於ては昔日と曆を異にしあれば四季も從て動かざる可らず。然るに新俳句を見るに秋の部に天長節あり。冬の部に十月の句あるが如きは矛盾の甚だしきものと云はざるを得ず。余は此に於て明治新派の俳人が依然俳諧歲時記草木等に據り季を分ち題を課するが如きは改良したきものと存候。此邊いかゞに候や。

答 梅を春と定め落葉山茶花を冬と定むるは分類上便宜の事に屬す。冬の末に梅を詠み秋の末に落葉山茶花を詠むも勝手なり。併し梅を冬と定め落葉山茶花を秋

と定むるは一層不適當なり。今日は公事に太陽曆を用ひ居れど田舎にては祝祭其他の事凡て太陰曆に従ふ處甚だ多し。故に俳句には新曆の句と舊曆の句と混じあるを免れず。天長節を秋の部に入れたるは秋なるが爲めなり。冬の部に十月の句あるは陰曆の十月を詠みし句なればなるべし。問者の季を分ち題を課すと云ふは其意義明瞭ならず。因に云ふ春夏秋冬は新曆にても舊曆にても變ぜざるものなり。

○第二十一問 當地(盛岡)は梅も櫻も同時に咲き申候櫻散らざるに子規啼き卯の花の中に桃の花咲き菜の花も薔薇も堇も一時に綻び候様な次第にして暮春と初夏と混同するには閉口の外無候。此實景を詠まんとすれば春夏混雜の句出来申候が夫にても差支無御座候や。

答 少しも差支なし盛岡の人は盛岡の實景を詠むが第一なり。

○第二十二問 鳩の浮巢の鳩と云ふ字は何と讀み亦いかなるものなりや。

答 鳩は『には』と讀み亦『かいつぶり』とも讀み水鳥の最小なるものにしてよく水

をくゞるものなり。水鳥の巢は水面に浮ひ居る故浮巢とも云ふなり。

○第二十三問

わいへんはとばりもちけり星今宵 鳴 雪
何の意味にや。

答 催馬樂に「わいへんはとばりちやうをもたれたるを大君きませ聲にせん」云々といふ歌あり。此意を七夕にとりあはせて作りたるなり。「わいへん」とは我家と云ふことなり。「とばりちやう」とは帷の事なり。

○第二十四問

曇りぬと妻の話や遠蛙

とある妻を只女としては趣味を損するにや。

答 妻が夫に向つて話す言葉なり。女とばかりにてはいかなる女とも知れ難し。

○第二十五問 俳句分類は好き句のみを撰びしや。

答 好き句のみにあらず、名高き句、特に注意を要する句は月並調にても載することあり。

○第二十六問 募集句中に「かなめ垣」といふが二三箇所見えたり、いかなる垣にや。

答 「かなめ」は木の名にて若葉は赤きものなり。東京にては墓の圍ひには多くかなめ垣を用ふ。

○第二十七問

菜の花や遊女分け行く野の飯成

飯成は何と讀むか又何の事なりや。

答 飯成は稻荷なるべし。

○第二十八問

春の夜によき女孺見たりさし油

女孺とさし油の義を問ふ。

答 女孺は「つま」と讀みて俗に女房と云ふが如き廣き意味なるべし。さし油は行燈に油をさし加ふることなり。

○第二十九問 第七號の「俳句と聲」の中に、

奥 山 や 五 聲 つ ぐ 聲 を き く 去 來

とあるは活字の誤植にや。

答 「鹿をきく」の誤りなり。

○第三十問 ハタオリと申す蟲は少しも鳴き申さず晝間野徑を行けば驚きて飛び去る羽音のきちくと申し候のみ。子供等其後足を促ふれば飛ばんとしてあせり候爲め體を上下に運動致し候故ハタオリと申す由或人の申候。是は前號御説明のハタオリと全く異なり候にや。

答 夫は我郷里にてもハタオリ又はハタハタと云ふ。古書にあるハタオリは前號

に説明せしが如く夜啼く蟲なり。

○第三十一問 初學者に參考となるべき俳書二三御指命下され度候。

答 古俳書は得難ければ博文館出版の俳諧文庫を見るべし。其中にて蕪村曉臺全集など最も面白からん。明治の俳句を見んとならば民友社の新俳句などか。

○第三十二問 「俳句新派の傾向」「俳人太祇」などを讀みて複雑と云ふことの趣味を幾分か悟りたれど猶疑はしき處あり。元來俳句は十七字の内に束縛せられたるものなれば其趣向は單純を旨とする者にはあらざるか。複雑なる趣向を顯さんとすれば斧鑿の痕見えていやみの生ずる事なきか敢て示教を乞ふ。

答 複雑と云ふも單純なる俳句に比較して云ふ事なり。他の長き韻文の如く複雑なる能はざるは論なし。複雑なるが爲めにいやみの生ずる事あらば素より佳句と云ふ可らず。いやみの生じても複雑なれと云ふには非ず。

(四)

○第一問 季の題「樂降」及び「喰祭」の由來并に鮓を特に夏の題となし來りたる理由共に伺ひたし。

答 歲事記に「五月五日を樂日と言ひて、この日一切の樂草をとるなり。又た是日雜藥を競ひ採る夏の小正にいふ、藥を蓄へて以て毒氣を止除す」とあり。俗説に、この日空より藥が降ると言ひならはせり。喰祭は知らず。鮓は夏季に多く拵へるもの故、夏季に入れたるものならん。今日普通東京にある鮓は四時絶えずあれ共、このやうの拵へかたは後世の事にて、昔の鮓は肴の腹へ飯を充てたる、鮓鮓鮓などの如きものなりしなるべく、肴のとれる時又た其肴の味の良き時も夏に限られたるもの多かりし如き、其多くは冷たきものを賞翫したる如きも鮓の夏

季となりたる一原因なるべし。其上鮓はつけて後直に食ふものに非らず多少なれ加減を待ちしものなれば、そのなるよといふことも自然夏の方適したるやう覺ゆ。鮓の句の俳書に見えたるは延寶の末頃よりなり。

○第二問 「風薫る」といふ題の意味を問ふ。

答 唐の太宗の詩に薰風自南來、殿閣生微涼。又呂氏春秋に東南之風曰薰風とあり。

○第三問 「ほととぎす」第二卷第六號子規子選句に「人情は手の裏返へす櫻かな」といふあり。ちと如何はしきやう思はるよが、是にも趣味のあるにや。

答 趣味ありと言ひ趣味なしといふは、各人の見識による事なり。別に議論のしやうもなし。

○第四問 「欺いて行ぬけ寺や朧月」の句の解釋を乞ふ。

答 朧月の夜寺のものをだまして其寺を歩き抜けたといふなり。欺いてと言へば、

始め通り過ぎんとせしを咎められでもしたるなるべく、兎角詞を左右に托したるさまも見ゆ。行きぬけ寺と名詞にしたるは、俗にぬけ道などいふ例にて句の働きなり。

○第五問 『名月や湖水に浮ぶ七小町』の句の解釋を請ふ。

答 この句は芭蕉の『月見賦』中にある句にて、琵琶湖に月を賞したる時の句なり。名月の夜湖水に七小町が浮んで居るといふ理想の句にて、湖水の水なるが爲め自然うかぶともいふなり。實際浮びたるにあらず、たゞ月明かなる湖上の景を見たる時の理想なり。七小町といふは謠曲に草紙洗、通小町、鸚鵡小町、卒都婆小町、關寺小町(尙他に二ツあれども判然せず)をいふなるべし。然れ共他にそをいふに非ずして、小町におとらず歌をよくよむ女の七人ありつるをいふといふ説もあり。湖水に小町を配合せしは、同月見賦中にもある如く蘇東坡の欲把西湖比西子、淡粧濃沫相宜といふ詩句あるより、それに倣ひたるものなり。

○第六問 繪畫の多くの對象は空間的の物象にして詩(俳句をも含む)のそれは多く時間的なりといふ議論は適切なりや。若し然りとせば、俳句に於て如何ばかり絶妙に空間的の物象を言ひ現はし得るも到底繪畫に及ばざるべき理にてはなきか
長々と川一筋や雪の原
の句に就ても、若し此景を繪畫に寫さば容易に美感を人に與へざるか(俳句に比して)且つ

尼寺やよき蚊帳垂るゝ宵月夜
鹿ながら山影門に入る日かな
等を以て繪畫的なりといふ。既に繪畫的といへば之を繪畫に表現して視覺に訴ふるの優れるに非ざるか。

答 ある一つの景色を現はすに、繪畫を以てすると俳句を以てすると、其二つにては繪畫の方が俳句よりも精密に現はし得る事論なし。然れども巧拙あり、繪畫

にして拙ならば、如何に精密に書きたりとも、十七字の俳句に及ばざる事あり。一概に論すべきに非ず。

○第七問 凡兆の句は猿蓑集以外にも有之候や。

答 凡兆の句猿蓑以外には極めて少なし。元祿の俳書には、時に凡兆のを見る事あれ共、皆一句二句位に止まる。蝶夢の類題發句集には、猿蓑以外の句少しありたりと覺ゆ。因にいふ。加生といふも凡兆の事なり。

○第八問 去來の句七部集及續虛栗去來抄以外にもあれば其書名御教示を請ふ。

答 去來の句は大方去來發句集(蝶夢編)にあり。

○第九問 左の一句俳句になり居り候や。

早馬の城下に近き若葉かな

答 城下に近きといふ詞の爲め、早馬といふものゝ早しといふ感じもなく、寧ろ一所にじつとして居るやうなり。是れ此句の大缺點なり。

○第十問 左の二句季なしと思ふ如何。

築地派のお講さびしや普請中

吉原で人にはぐれぬ酉の市

答 お講は親鸞の忌日にて十一月廿二日より廿八日迄の間營むといふ。報恩講とも御佛事とも御霜月ともいふ。御講は報恩講の略なるべし。酉の市は十一月の酉の日に立つなり。

○第十一問 蕪村の左の句は如何なる古事蹟あるにや御教示を乞ふ。

繪團扇のそれも清十郎にお夏かな

答 お夏清十郎の事實は知らねど西鶴の五人女にも出で近松の作にも五十年忌歌念佛として此事を演べあり。清十郎といふ男、姫路の商家に奉公するうち、主家の娘お夏と通じけるが、主人の金を盗みしといふ言譯立たずして死罪に行はれ、お夏も其菩提を弔ふとて尼になりける、是れあらましの筋なり。清十郎殺されて後、

お夏が始めて其事を聞き知る處を叙して、五人女に、

何物も知らぬが佛お夏清十郎がはかなくなりしとは知らずとやかく物思ふ折
ふし里のわらべの袖引きつれて清十郎殺さばお夏も殺せと歌ひける聞けば心
にかかつてお夏そだてしうばに尋ねければ返事しかねて涙をこぼすさてはと
狂亂になつて生きて思ひをさせうよりも子供の中にまじはり音頭とつて歌
ひける皆皆これを悲しくさまざまとめてもやみ難く間もなく涙雨ふりてむか
ひ通るは清十郎でないか笠がよく似た菅笠がやはんは、のけらく、笑ひうる
はしき姿いつとなく取り亂して狂ひ出でける

云々とあり。最後に

其頃は上方の狂言になし遠國村々里々迄ふたりが名を流しける

云々とあるを見れば當時専ら此事を取りはやしたりと見えたり。『向ふ通るは清十郎でないか笠がよく似た菅笠が』といふ文句は狂言などにて言ひ始めしか今に人

の口癖に残り居るなり。近松の歌念佛にもお夏笠物狂ひといふ條に

よさこいと、云ふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寝たところ、裾に清十郎
と寝たところエ、少くはん、観すれば夢の世や、寝てあたゝめしほところ子、
いつの間にかうかれそめ、三界を只家として、袖笠雨の舍りにも、心とゝめ
ぬ假枕、流れにあらぬ川竹の、笹のおざゝのびんざゝら、花の手おほひ、お
手をひかれた、これも熊野の修行かや、姉様のこれの、勸進柄杓の、ゑ顔よ
しとて柳が招く、柳の髪を何故に、浮世恨みて尼が崎、尼が崎とは海近く、
なぜにそなたはしほが無い、節はあはれに身はだてに、歌は念佛の歌比丘尼、
向ひ通るは清十郎じやないか、笠がよく似た、菅笠がよく似た笠が、笠がよ
く似た菅笠がエ

云々とあり。蕪村の句は團扇の繪にお夏清十郎を畫きしを詠める者ならんが、こ
れにつき鳴雪氏はは、蕪村の頃お夏清十郎の芝居流行りて團扇にも其似顔

など多かりし者かと。此説然るべし。聲曲類纂を見るに、大阪北堀江の豊竹座の浄瑠璃外題安永七年十二月、夏浴衣清十郎染(専介、豊春助作)興行とあり。同じつきに寛政六年六月、お夏清十郎花楓都模様(菅専介作)興行とあり。(但しこれは蕪村歿後なり)江戸浄瑠璃外題の内にお夏清十郎(天明元年七月、森羅萬象、雙木千竹作)とあり。以て、當時、お夏清十郎の事を仕組める狂言の流行りし事見る可し。蕪村の句「それも」とは「それも亦」の意にて、さる團扇の澤山ありしをいふならん。

附記『ほととぎす』第二卷第九號本欄第廿八問

春の夜によき女孺見たりさし油

といふ句の女孺を「つま」と読み、俗に女房といふが如き廣き意味なるべし。と解したるは誤りにて、女孺は「によじゆ」又は「によじゆ」と読み女官の名にて其中にても卑しき役をつとむるものなり。或書には内侍司に屬して、掃除點油

等を掌るとあり。されば此句も自然宮殿中のありさまにて、「さし油」といふも判然すべし。され共以上「によじゆ」に「によじゆ」と言へるには皆「女孺」とかけり「孺」と「孺」との字義に強てかゝはるにあらざるも、句の作者は何か他により所ありて斯く書けるにや、果た誤りたるものにや、尙ほ考ふべし。

(五)

○第一問 支麥調とは何ぞ。

答 支麥調とは支考麥林の調なり。支考は美濃派の元祖にして、其美濃派なる者は極めて俗なる調なり。麥林は又乙由ともいひ、これも支考と同時代に出で、伊勢派とかいふものを起す。兩者の調子は異なるべけれど其卑俗なるは同じ事なれば蕪村は之を輕蔑して支麥といへり。猶我等の今日に於て月並調といふと相似た

る者、支麥調は無論月並調の一部なり。

○第二問 ほととぎす九號附録十九頁に「因にいふ春夏秋冬は新曆にても舊曆にても變ぜざるなり」とあり。余の見る所にては新舊二曆は慥に四季に相違あるものと思ふ。例へば新曆の一月は冬なれども舊曆の正月は春なるが如し。此説如何。

答 前々號にいひしところは新曆の一月と舊曆の正月とが同じといふに非ず。例へば立春の日が今日とすれば新曆舊曆いづれにても今日が立春なりといふ事なり。今少し詳しく説かんに、夏至といふは一年にて日の最長き時、冬至といふは日の最短き時、春分秋分は晝夜平分の時、而してこれ等は初より曆にて定まる者にあらず天文學者が天文の觀測より割り出して其結果を示す者なれば、それは何の曆にも拘らず總て同日なり。(同日とは同名稱の日といふ事に非ず)さて立春といふは冬至後何日目、立夏は春分後何日目、立秋は夏至後何日目、立冬は秋分後何日目と定むる事故これにも曆の上の相違あるべくもあらず、即ち何の曆にても

同日同時に立春に入り立秋に入るなり。例へば今明治卅二年は新曆の八月八日(即ち舊曆の七月三日)午前三時五十九分、立秋に入る譯なれば、此時より以後、新曆にても舊曆にても同じく秋となるなり。されば新曆は既に秋に入り舊曆はいまだ秋に入らずなどいふ理窟は無し。いつでも同時刻に春に入り秋に入るなり。この春夏秋冬といふ名稱に就きては種々の論ある事なれど、余は立春より立夏迄を春とし、立夏より立秋迄を夏とし、立秋より立冬迄を秋とし、立冬より立春迄を冬とする事に定め居れり。立春立夏等は舊曆にては毎年、日が變る故一々曆を見ねば分らねども、新曆にては年々同日なれば一度之を記憶し置けば、旅中にもたやすく四季更迭の日を知る事を得べし。立春は二月四日、立夏は五月六日、立秋は八月八日、立冬は十一月七日、大略此の如し。

○第三問 千歲不易、一時流行とは俳句上如何なる義なるか。

答 これは元祿時代に流行りし詞にて去來許六などが頻りに議論せし事あり。勿

論箇様な詞は人々によりて種々さつたに解する故、今こゝで余が解釋するとも其解釋が昔の去來や許六の思ふて居た處とは吻合せざるべし。されど其字義に就きて試に解せんか、千歳不易とは、俳句の神韻的なるまじめなる者は、何時見ても年立つても味が變らぬ、即ち十年前に善かつた者は十年後にも矢張善い、百年千年前に善つた者は百年千年後にも矢張善い、といふ事なり。一時流行とは、俳句の滑稽的なる者數奇なる者などは去年善いといひし句も今年は悪くなり、今日面白しといひし句も明日は面白しとはいはぬやうになるといふ事なり。例へば

湖の水まさりけり五月雨　去　來

といふ句は元祿の當時に在りても名句といひしものにて、今も猶人は之を名句といふ。これ即ち千歳不易の句なり。

長松が親の名で來る御慶かな　野　坡

此句は元祿の時には珍らしくて面白かりし者なるべけれど、今日では月並連も能

く此位の句は作るべし。これ即ち一時流行の句なり。許六は流行は二三年に一轉する、其流行に後るゝ者は論ずるに足らず、とて暗に其角を譽め去來を誹りしかば、不易好きの去來は、不易の句を作る者亦能く流行の句を作る、流行の句を作る者必ずしも不易の句を作らず、などいひしなり。一口に二者の區別をいはゞ、不易とは陳腐になりにくい句、流行とは陳腐になりやすい句といふやうな事にもなるべし。固より陳腐とか新奇とかいふも人々皆僻する所ある故、自分の好きな趣向は、趣向の種類に拘らず陳腐になり難き傾きありて、一向にあてにはならず。されど大體の上に不易、流行の別いくらかはあるべし。漢詩家に格調派と性靈派とありて相争ふ事あり。文字の面こそ違へ、格調派は不易に近く、性靈派は流行に近きが如し。

○第四問 第九號牡丹選句中

牡丹剪つて蟻に驚く女かな

は二三年前の日本紙上に於て慥に露石氏の作たる事を記憶致候。抹殺ありて可然存候。

藤原の榮華久しき牡丹かな

これも二三年前の日本紙上にありし様覺ゆる其村氏の「一門の榮華たくひなき牡丹かな」と趣向能く似たり。陳腐には屬し不申哉。

二 三 片 牡丹崩るゝ整

昨年日本なりしか青々氏の「禪宮や牡丹崩るゝ整」といふがあり。されば陳腐には無之哉。又兩句何れが勝り申候哉。

切らんとして切らでやみたる牡丹かな

第一卷ほとゝぎすなりしか「大輪の牡丹剪るべく惜むべく」といふがあり。これも何れが勝り候哉。

人も無き應接室の牡丹かな

はすぐ「寂として客の絶間の牡丹かな」を思ひ出し候。畢竟同じ趣向の様存候。如何に候哉。

答 「蟻に驚く」の句は前號に抹殺する筈なりしを忘れしなり。「藤原」の句、類句ある事は忘れ居たり。併し句柄は「一門」の句より遙に勝りたれば保存するを善しとす。「整」の句も類句ありとすれば抹殺して可なるべく、但優劣は定めかねたり。「大輪の牡丹剪るべく」といふは句柄拙し。「切らんとして」の穩當なるに如かず。「應接室」の句は趣味の上に於て蕪村のに及ばず。されど應接室といふ趣は蕪村の知らざる處、並び存するを妨けず。總て全く同じき句又は極めて似たる句などで來し時は心づきし人斯く注意あらん事を望む。

○第五問 盧子氏の

虎の皮の禪に居る風かな

の句は何の季に屬すべきか。

答 雑ならんか。

○第六問 蕪村句集講義中に晉の謝靈運とあり。然るに或る書には靈運は宋人とあり。何れか正しきや。

答 宋人なり。

○第七問

淺草の古き本屋や 煤拂 碧梧桐

此句は所謂動く句なるべし。如何となれば上五文字は『本町の』京橋の『横濱の』品川の』等何とでも更へ得べし。併し淺草に限るにや。

答 淺草の古本屋として名高き淺倉屋など思ひ寄せたる作なるべし。

○第八問 俳諧の鼻祖は誰人なりや。宗鑑か宗祇か守武か承りたし。

答 宗鑑守武を鼻祖ともいふべきか。

○第九問 第九號の募集句中牡丹の選に入りしは僅に卅七句のみ。之に反して薔

薇の選に入りしは約五百句の多きあり。斯く迄大多數の差あるは如何なる故にや。
答 入選と落選とは境界線の高低によりて選句の多少を生ずるなり。境界線を高き處に置けば選句少く、低き處に置けば選句多し。境界線の高低は人により時によりて異なるべし。

○第十問

李夫人の化して屏風の牡丹かな 尹 之

此句の御解釋を願ひます。

答 李夫人は漢の武帝の寵愛したる美人にして、李夫人死後に武帝は再び其顔を見たしとて反魂香を炷きたる事などあり。此句意は屏風に描きたる牡丹の美しさを李夫人に比したる者にして、此畫牡丹は李夫人の生れ變りかといひしなり。

○第十一問

あざ笑ふ花和尙の聲やふぐと汁

此句の花和尚とは何と読み何の意味なるか。

答 花和尚は「くわをしゃう」と字音に讀む。水滸傳といふ支那の小説の中に出て来る豪傑なり。もと魯智深といふ男なるが人を殺して、其罪を逃れんために僧となる、満身に入墨ある故花和尚とは呼ぶなり。此和尚なくくの亂暴者にて僧となりし後も好んで肉食などし、常に鐵禪杖を携へて歩行く、併し正直な性なり。

○第十二問

李夫人を抱けば煙の初音かな 淡々

右夏の部にあり。只初音といひて時鳥の意に通るや伺ひたし。

答 初音といふは普通に鶯と時鳥とに用う。李夫人の句にして鶯の句と聞えずば時鳥の句たる事知るべし。

「豆腐屋のあとを根岸の初音かな」とは鶯の句なり。

○第十三問 俳諧史に化鳥風といふあり。趣味ある一風にや。

答 趣味なき一風なるべし。

○第十四問 古事等を援用して間接に季を言ひ現す事を得べきや。例

詩に倦んで宰予を學びしびれけり

宰予を學ぶといふよりして右は夏の句(晝寢)として差支なきか。

答 差支無し。併し箇様な謎のやうな句には些の面白味もつかぬなり。

○第十五問 俳句評釋第十頁に俳人の名を列舉せし中に……曲翠……曲水とあり。兩者別人の如く記されしは誤に非るか。

答 曲翠、曲水、一人の號なり。翠と水と通はし用うるのみ。珍夕、珍碩も此類なり。

○第十六問 第七號募集俳句中に「妹が門琴になる木の若芽かな」といふあり。琴になる木は桐の木なるべし。わざく桐の木を琴になる木と作りしは奇に過ぎ却て詩趣を没却する者にはあらざるか。

答 此句で琴になる木といふは桐の木のことには限らず。木は何の木でも琴になる木であれば善きなり。特に琴といふ聯想を起したるは妹が門なる故なり。さるを單に純客觀の句として「妹が門に桐の若葉かな」と改めなば妹が門と桐と調和せぬ者となるべし。但し此句は左程善き句にはあらず。

○第十七問 芭蕉翁遺語なるものゝ中に「木の花は朝咲く、草の花は夕に咲く」とあり。新派諸君に於ても右の如き標準によらるゝにや。

答 草木を詠むには實際の草木を見て詠むが善し。芭蕉翁遺語などいふ者に據る必要は少しも無きなり。草の花でも朝咲いて晩にしほむ者多し。箇様な者は芭蕉の遺語に非ること必せり。縦し遺語なりとするも明治の俳人がこんな者をあてにするやうではなさけなき次第ならずや。

○第十八問 秋色女の「武士の紅葉にこりす女とは」の句には「冠里公へはじめて召されて」との前書あり。此武士の句を好色を誡めたる句とすれば秋色女が冠里

公を誡めたる事となり頗る其意を得ざる如し。如何となれば公は堂々たる大名にして殊に閣老をも勤められたる人なれば一少婦女子が好色を云々するなど心得難き咄なり。此邊の消息如何にや承知致度候。

答 冠里公へ召されたる時の事情を知らねば此句が冠里公を誡めたる者なりや否やは知り難し。併し冠里公が大名であらうが閣老であらうが好色の事などあらばそれを誡めぬにも限らぬなり。又此句が冠里公の好色をたしなめた者とするも此句を冠里公に示したりや否やそれも分らぬ事なり。(第九號隨問隨答第十八問參照)
○第十九問 左の句は月並調には非るか。

討 死 の 便 り あり けり 年 の 暮 虛 堂
鶯 の 來 る が う れ し き 庵 かな 麥 人

答 討死などいふ事は月並派にては詠まぬならん。又「來るがうれしき」などいふ無邪氣なる語は月並派にては得いはぬならん。

○第二十問 剽竊とは此打水の句の如きをいふか、

草の雨祭の車過ぎて後蕪村
打水や葬の車の過ぎしあと香墨

答 剽竊と翻案とは程度の相違なり。此句を剽竊と見るか翻案と見るかは各人の意見にあり。

○第廿一問 俳諧大要第七十五頁(編輯に本は四十八頁なり)に「静かさは栗の葉沈む清水かな 尙白」とあり。然るに此句は七部集に依れば柳陰の句なるが如し。如何。

答 猿蓑の几右日記に亡人陰柳とあり。陰柳なること疑なし。尙白の句とせしは誤なり。

○第廿二問 左の數句附圈の處御説明を請ふ。

茨散るうはなり打のしもとかな 鳴雪
薔薇花の下に兵を談ずる二喬かな 同

梅 龜の墓に花なし 霜柱 子規

答 昔の風俗に、前妻を離縁したる男、後妻を娶れば、前妻及び其味方は手に手に棒など持ち來りて其後妻を打ちたゞきなどする事あり。それを「うはなり打」といふ。しもとは答なり。二喬とは昔支那三國の頃、吳にありし姉妹二人の美人なり。曹操も此美人を得んと思ひしが望を遂げず。遂に二喬は孫策孫權兄弟に嫁したり。梅龜は我等仲間の俳人にて右の手を切斷し左手にて字を書きなどせしが五六年前に死し小石川の植物園に近き寺に葬りあり。

○第廿三問 擬人法は何故に排すべきにや。

答 いやみあるが故なり。

(六)

○第一問 樗堂は何時代の俳人に候や。

答 樗堂は栗田氏、伊豫松山の商人、初め蘭芝と號す。二疊庵ともいふ。文化十一年八月廿日歿す。

○第二問 『有樂忌の話は難波戰記かな』の句、ほととぎす四號募集俳句に在り。有樂忌とは何人の忌にや。俳諧歲時記冬季の中に見當らず候。

答 有樂忌とは織田有樂齋の忌日なるべし。有樂齋は信長の弟にして茶を利休に學ぶ。茶に名ある人なり。元和七年十二月十三日七十(一説七十五)にて歿す。十月二日なれば有樂忌は冬季なり。歲時記に無くとも季に定まりある者は季とするに差支無し。

○第三問

せき立てつ 飯の暑さよ 汽船宿

斯る折のあつさは暑さといはんより熱さといふべき者にあらざるか。

答 飯につきていはゞ熱さなり。併し此句は飯の熱さに夏の暑さを兼ねたる者なれば暑の字を書くも不都合なかるべし。

○第四問 左の句の解釋を請ふ。

だんだうのかへぎに逢ひぬ 臘月

夕顔の花にさめなる 暑さかな

答 二句共に文字の間違ひあり。左の如し。

だんだらのかつぎに逢ひぬ 臘月

夕顔の花にさめたる 暑さかな

昔京の女は多く被衣かけて歩行きしが、其中にも宮中の女はだんだら筋の被衣を著たりとか。

○第五問 猿蓑集の洋製物は何地に有之候や。其代價御通知を乞ふ。

答 七部集の翻刻は一時多く出たれど今は跡を隠したり。俳諧文庫第一編芭蕉全

集の内にも獲葦はあり。これは博文館出版にて一冊定價二十五錢。

○第六問 「新俳句」の發行所及び代價郵税御教示を乞ふ。

答 京橋區日吉町四番地民友社發行、定價三十五錢郵税は六錢位なるべし。

○第七問 俳句は叙事詩に適して抒情詩に適せざる者に候や。

答 叙事詩抒情詩といふは西洋のエピック、リ、ックの事にや、それならば此等の名稱が俳句に適當せぬ事論を俟たず。問者はどんな意味にて此問を發したるか、叙事詩も抒情詩も俳句も何も知らぬ人ならではの筒様な問を發すべき者に非ずと思ふ。

○第八問 日本國詩の發達に關して俳句は貢獻する所ありや否や。若しありとすれば叙事の點か抒情の點か。

答 愚な事を問ふ人かな。俳句も日本國詩なるに、これが貢獻するとかせぬとか聞えぬ事なり。俳句が發達すれば即ち日本國詩の一部は發達したる道理ならずや。

叙事か抒情かは俳句を見れば分るべし。俳句を見てそれが叙事であるか抒情であるか分らぬならば叙事も抒情も俳句も分らぬ人なる事疑ひ無し。

○第九問 俳句は少年に於ては詩想の發表に適せざるものに候や。

答 問の意明瞭ならざれども、少年時代の熱情は俳句に現すこと殆ど難かるべし。○第十問 芭蕉翁が元武門に出でし其經歷上より、又奥の細道の夏草の吟、卯辰紀行の須磨懷古の文等に徴するも翁が唯風月に放吟せる風狂騷客の類ならざるや明なり。この多血多涙の翁にして久しく東都に寓し親しく柳營の權勢驕奢に接觸せるもの、一度帝都に來り皇居の式微を一見して必ず多少の感慨無きを得んや。則ち潜に其懷を述べたるもの

京近き所に年をとりて

誰人か菰着てるます花の春

の句に非るか。此吟殊更に京近くにてと題せる、言葉遣ひの慎重なる唯風月の吟

にあらずして皇室の式微を歎ぜるは察するに難からずと存候。然れどもこれ余が私見に過ぎず。幸に質問欄を借りて教を待つ。

答 芭蕉は俳人にして慷慨家に非ず。俳人が古蹟を訪ふて古英雄を弔ふは其雅懐より出づ。是を以て慷慨家と目するは非なり。芭蕉が誰人の句を作りたりとて勤王家といふべくんば日光にて『あら尊青葉若葉の日の光』と詠みしを證據に佐幕家ともいふべからん。此の如き臆説は無用の事なり。世人時に此様の論を吐いて喜ぶ者あるは單に奇を好むのみにあらず芭蕉をえらき者にせんとの考より出づるなるべし。然れども慷慨家が俳人よりえらき譯は少しも之無し。芭蕉をして俳人群中を脱せしめ慷慨家列傳の中に加へんには芭蕉は一文半文の値打をも有つ能はざるなり。

○第十一問

晝 見 れ ば 頸 筋 赤 き 蠶 かな

の句は文學上最も價值ありとすべきや。如何。

答 善き句に非ず。されど一趣向ある句は存し置くべし。一讀の價はあらん。

○第十二問 聯句に、

炭 賣 の 己 か 妻 こ そ 黒 から め
人 の 装 ひ を 鏡 と ぐ 寒

といへるあり。付意の解釋を乞ふ。

答 鏡とぎが他人の化粧を寫す爲の鏡をとぐ事を炭賣の己が妻といふに對して附けたるなり。繰り返していはんか、炭賣の妻の色の黒からうといふ事と、鏡とぎが自分の妻を寫す爲で無い鏡をとぐといふ事と二對の貧夫婦を並べたるなり。

○第十三問 古今を通じて無量計るべからざる大數の俳句中にて横綱たるを得べきは何といふ句なりや。

答 そんな句がある者にあらず。そんな句があると思ふは素人量見なり。

○第十四問 新派の句をなさんとする者が熟讀すべきは誰の句なりや。

答 元祿にて芭蕉其角去來等、天明前後にて太祇蕪村几董等。

○第十五問

花 茨 に 石 斧 掘 出 す 古 墳 かな

石斧と古墳とは時代異なり。故に古墳より石斧の出づるは實に異例なるべし。句には差支なしや。

答 選者も作者もそこ迄は詮索のとゞかざりしなるべし。

○第十六問 十句集さては運座は點取俳句にはならざるにや。

答 點取俳句といふ事の意味分らば答へ難し。

○第十七問

芭蕉忌の去來も老いぬ卯七など

といふは如何なるわけにや。

答 去來は芭蕉の高弟にて殊に芭蕉とは最も親しかりし人なり。卯七は長崎の俳人にて去來と同郷なれば或る年の芭蕉忌に兩人京などにて出逢ひし事もあらんとの想像より出でたる句なるべし。

○第十八問 ほととぎす七號に

渡 し 呼 ぶ 女 の 聲 や 小 夜 千 鳥 蕪 村

此句は句集に無し。恐らくは蕪村の句にあらざるべし。如何。

答 古集に無ければとて蕪村の句に非すと断定する理由にはならざるなり。今日傳はる所の蕪村句集は前編とあり。後編は世に出でざりしかど、前編とある以上は少くも蕪村の句の半は句集に出で居らざる筈なり。

○第十九問 新俳句展讀の際解し得ぬ語を左に列記致候。詳細教示を蒙り度候。

一八 むら鳴く 笹鳴 零餘子 岡兩 なるふる 鷲破嵐

蟬 竈馬

答 一八は『いちはつ』又は『いつばち』といふ。漢名は紫羅傘なり。春晩夏初に咲いて『かきつばた』と善く似たり。草屋の棟に植ゑたる處あり。むら鳴くはむらに鳴くなり。むらは一様ならざる意なり。笹鳴は『さゝなき』と讀む。借字なり。さは小の意にて少し鳴くなり。これは冬季鶯の子の啼き習ひする事をいふ。零餘子は『ぬかご』なり。地方によりて『めかご』とも『むかご』ともいふ。いもの如き質にて小さく丸き者なれど蔓になる者にして根にはあらず。煮て喰ふべし。罔兩は『かけほう』と讀む。影法師の事なり。併し時によりては音にて『まうりやう』と讀む事もあるべし。なるふるは地震なり。驚破は『すはや』と讀む。物の急に來る瞬間をいふ。蟬は『こほろぎ』なり。竈馬は『いと』なり。但し蟬も竈馬も異名同物なり。

○第二十問 五元集中

芭蕉庵を訪ひて

露に 樂教へん 聲の あや

南都にあそぶ雨

傘や 薪の 夜の ありとをし

右二句の解釋を乞ふ。

答 前者は鶯に聲の善く出る樂を教へてやらうとの滑稽なり。後者は奈良の薪の能の事にて蟻通といふ能を見たる事なり。雨夜なれば傘さして見たるならん。

○第廿一問 左の句の句意御教示被下度候。

元日 や されば 野川の 水の 音(一)
 松かざり 伊勢が 家買ふ人 や 誰(二)
 明星 や 櫻さだめ ぬ山かつら(三)
 あわれ や な甲の 下の きりぐす(四)
 西行 も 娘持ち ちて や 衣かへ(五)

やぶ入や牛合點して大原迄(六)

答 第一は年のあらたまると共に水の音もあらたまりて春めいて來たといふ意、さればは果してなどいふやうな心持なり。これは實際に水音の變りたるにあらず作者の心持をいへる者にて、歌などにありふれたる趣向なるべし。第二は伊勢といふは古の歌よみなり。此女おちぶれて家を賣りしといふ事をこゝに用ゐし者なり。舊冬來長く賣れざりし家を歳旦に見れば松飾など立て、人の住みけるを、伊勢の家に比べていへるならん。「松飾」と「買ふ」とを對照しめでたき心持を見せたり。「人や誰」は「人は誰」の誤。第三は吉野の花の曉景を詠みし者にて、山かつら(曉の横雲)引渡していづれ櫻とも見分からぬ上に明星一つきら／＼と光る様なるべし。芭蕉はほめたれど、これも歌にありふれたる趣向にて左程面白からず。明星を取り合せたるは遙に歌に勝りたれど「定めぬ」といふは惡き言葉なり。第四は加賀の太田神社にて實盛の兜を見し時の作なればいくらか悲哀の意を含めたり。

兜の下の方できり／＼すの鳴いて居るを哀れと詠みし者なれど、必ずしも實際其處にきり／＼すは居らざりしを詠み込みしとするも差支無し。「あわれやな」は「むざんやな」の誤。第五は西行は妻子ありし人と傳へけるにより、方外の人ながら娘が新衣を縫ふてくれしを著かへたらんかと想像していひしなり。第六は京に奉公せし女やぶ入にて大原へ歸るとして牛に乗りたるなり。其牛は其女が大原に歸るといふ事を心得てひとりで大原向いてさつさと歩む様なるべし。

○第廿二問 左の二句御解釋被下度候。

阮 咸 が 三 味 線 し ば し 時 鳥 其 角
葛 水 や 王 敦 を 憎 む 女 あ り 几 董

答 阮咸は竹林七賢の一人にて月琴を創めし人なり。月琴の形三味線に似たるを以て三味線と置きかへたる者にて、其置きかへたる處即ち阮咸といふいかめしい唐人と三味線といふ日本の俗な物とを配合したる處に滑稽的の面白味を持たせた

るなり。「しばし」とは、時鳥が鳴く故しばらく三味線を罷めろといふ命令詞を含めて見る。もつとも其角時代には今の月琴は日本にあらざりしなり。王敦は

王敦字處仲。少有奇人之目。時王愷石崇以豪移相尙。愷曾置酒。敦與導俱在座。有女伎。吹簫。小失聲韻。愷便歐殺之。一坐改容。敦神色自若。他日又造愷。愷使美人行酒。以客飲不盡。輒殺之。酒至敦導所。敦故不肯持。美人悲懼失色。而敦傲然不視。導素不能飲。恐行酒得罪。遂勉強盡觴。導還歎曰。處仲若當世。心懷剛忍。

と晋書にありといふ人なり。自分が酒を飲んでやらねばお酌の美人は主人のために殺されるといふ場合にあたりて、王敦はわざと盃を手にも取らなんだといふやうな意地の悪い残忍な人と見えたり。此句はそれを葛水に翻案したる者故極めて手軽く、意地悪の人といふ位の事に見るなり。殺されるなどいふ聯想は固より起らず。

附記

一、會て、落し文といふ夏季の題ありやと問ひし人ありしに、知らず、と答へ置きしが、先頃京の盲天外氏落し文と名づくる現物に説明を添へて送りこされたり。其文に

(前略)此頃此山中(比叡山)にて即ち「ほとぎすの落し文」を拾ひ得て御參考迄に相送り申候。これは栗の木の葉に限りたるものにて、拾ひ得し時は尙青葉にてうつくしきも御地著の時は最早枯葉となり興味少くと存候。

とあり。さて其現物は木の新葉とおほしきが小さく横に捲かれ(長六七分幅三分位)其捲きじまひの葉の端が必ず一端にかぶさりて其形恰も古の封じ文に似たり。故に落し文といふなるべし。叡山にては地に落ちてあるといふ事故蟲の巢くひたるか若しくは病葉の類なるべしとそれを開き見るに蟲も居らず又病葉とも見えす。人のこしらへたるかと思はるゝ程の者なり。横に捲いてあるは猶更

不思議なり。ほととぎすの落し文といふは夏の初め時鳥の啼く時にある故にし
かいふなるべく従つて季にも入りしならん。されどさる俳句見たる事無し。

一、前號随問随答第廿二問に二番の説明をしたる内に誤あり。二番は孫策と周
瑜との君臣に嫁したるなり。

一、曾て随問随答欄に『當飯』の和名ありや知らずといひしに三九氏報じて曰く
當飯。繖形科

異名 乾歸、大芹、文無、女二天、山蕨、名薛、夷靈芝、地仙圓、僧尾
草、馬尾當飯

和名 おほぜりといふ。漢方にて根を藥用に供す。毒草なり。

濟國産を最良とし我國にては兵庫縣福島縣より出づ。天然生の根は小にし
て香氣強く、培養したる者は根太く氣味を異にす。

(七)

○第一問 子規の俳諧大要の中、第四『俳句と四季』として記述せられたるう
ちに、秋の霜は俳句季寄の書には設けあれども作例は殆んど見る無しと。然るに
古人の句に、

薄赤き	雞のかしら	や	秋の霜	吏明
秋の霜	驚く志賀の山路	かな		以兄
馬士の手に	火をつかみ	けり	秋の霜	石草
膝抱いて	飯焚さ	びし	秋の霜	萬帯
長き日の	明けて	夜の	あり	秋の霜
手に	恥て	念佛	申す	や
			秋の霜	乙良

朝影や葉廣な草に秋の霜 秋の香
等敢て少きにあらず。如何。

答 俳諧大要は多く旅中に在りて書きし者にて座右に参考の書も無ければ記憶によりて善き加減に綴りし處少からず。秋の霜の如きも記憶に存したる句なかりしに因りて、殆んど見るなし、など杜撰に断定したる今更慚愧の至りなり。秋の霜の句は只今吾が分類中に記す者のみにても三十七句あり。近世の句を加へなば五六十句もあるべし。前に掲げし句の外二三を擧ぐれば、

秋霜や竹を放るゝ豆の蔓 風 荷
蹈草の起も直らず秋の霜 吟 江
岡崎の橋の長さや秋の霜 燈 外
藪伐れば家はさし出て秋の霜 成 美

苜蓿の關の迹

秋霜の威や今さらにはつかなる 樽 庵
因にいふ、問者の擧げたる句の中、作者石草とあるは故人五百題、新題林句集などに爾かあれども、句兄弟に尺草とあるぞ正しかるべき。

○第二問 太祇の句に、

な。折。り。そ。と。折。り。て。く。れ。け。り。園。の。梅
とあり。な。折。り。そ。と。は、折。り。て。は。な。ら。ぬ。と。い。ふ。事。に。や。

答 然り。萬葉にも勿の字を書いて『な』と讀ませたり。

○第三問 『秋の夕』と『秋の暮』とは同じ事なりや。

答 同じ事なり。

○第四問 蕪村の句に

紅葉見や用意かしこき傘二本
しぐるゝや用意かしこき傘二本

の二句あり。右は別句なりや。

答 句集には紅葉見の句ばかりあり。句は紅葉見の方宜し。或は初め「しぐる、や」とありしを後に「紅葉見や」に改めしやも分らず。

○第五問

よく見れば 薺花 咲く 垣根 かな 芭蕉
妹が垣根 三味線 草の花 咲きぬ 蕪村

これは蕪村が芭蕉の句を摸倣せしものなるべし。如何。

答 此二句は趣味も調子も全く變り居るなり。僅に薺花と垣根との配合だけ似たりとて摸倣といふべきにあらず。

○第六問

馬に寝て 残夢 月遠し 茶の煙 芭蕉
茶の煙とは何事に候や。

答 こゝで茶の煙といふは、朝、茶釜の下を焚きつくる煙の立ち上るをいふなるべし。もつとも茶といふには深き意味あるにあらで朝餉の煙といふも同じ位のことと見ゆ。併し支那の詩に茶煙颯などあるは朝餉夕餉の煙にはあらず單に茶を煎る時の煙ならん。

○第七問 左に記す蕪村の句の内に附圈の處を説明ありたし。

雨にとまる 玉水の宿の蝸牛(一)
家ふりて 幟見せたる 翠微かな(二)
雨やそも 火串に白き花見ゆる(三)
木刀も 請べき 猛首の團扇かな(四)
萩咲て 玉田横野へ 分れ行く(五)
水降もなく 古江の時雨かな(六)
窓の灯に 佐田はまだ寝ね 時雨かな(七)

鹽。わ。か。る。上。を。か。ら。く。も。行。時。雨。(八)
照。射。し。て。叫。く。近。江。や。は。た。か。な。(九)

答 一、玉水とは擔の玉水にて即ち點滴の意なるべし。蝸牛は雨中に居る者なれば玉水の宿としやれて言ひたるなり。二、翠微は山の高き處なり。三、火串の光に白き者見ゆるは花か露かと疑ひたるにて、「そも」とは雨かそもく花かといふ意なり。四、新五子稿に猛首とあれども猛者(もさ)の誤なるべし。五、玉田横野は河内の名所なり。六、水降は水際の誤なり。七、佐田は河内の地名か。八、鹽わかるとは海水と鹽と分離する意にて、鹽分る上を時雨の行くとは鹽田の上を時雨の行く事ならん。九、近江八幡は二人の獵師の名なり。これは曾我物語の趣を寫し出だせり。曾我物語に據るに、祐經が祐親を恨むる事ありて、其事を年來の郎従、大見小藤太、八幡三郎に語り祐親を殺さんと謀る。二人の者獵師となり狩に紛れて終に祐親の子祐道を殺すなり。

祐經が二人の郎従これを聞き大きに喜びかやうの處にてこそ隙もあれ、いざやねらはむとて、柿の直垂小袴にし、矢を竹つこにさし我身近くかきつけて白木の眞弓をうち負ひ、獵師の如くいであちて多勢の中に紛れつゝ伊豆の奥野へ入りにける。七日の牧狩なりけるに、夜も晝もつけ廻りけれども一矢射つべき隙こそなかりけれ。狩も既に過ぎければ大見小藤太申しけるは、一郎殿心を盡し今やくと待ち給ふらん hands を空しくして歸る事こそ口をしけれ、いざや我等思ひきり歸るさをねらはんと申しければ、八幡三郎これを聞き、然るべしとて、二人うちつれ、道をかへ先に立ちて伊豆の奥野口なる赤澤山の麓、八幡山と岩尾山とのすそに見倉の追立といふせこを尋ねて椎の木三本を小楯に取り、一のまぶしには大見小藤太、二のまぶしは手きゝなれば餘さん所は定の者と八幡三郎ぞ立ちける。(異本曾我物語)

大身を近江と書きかへたり。

○第八問 所謂舊派宗匠の作にて「黄昏や又一人行く雪の人」草の戸や日のさしかゝる雛の顔」等はいやみなき自然を詠じたる句と思へど如何に候や。

答 宗匠派の句としてはいやみ少き方なり。併しこんな句を佳句と思ふてはあてが違ふなり。宗匠等の句に一句でも善き句ありと思ふは畢竟趣味の發達せざる證據なればよくよく研究あるべし。「さしかゝる」など最拙き言葉なり。

○第九問

苗代のしきせに遊ぶ蛙かな

とは誰の句にして如何なるわけにや。

答 そんな句は無し。「苗代の色紙(しきし)に遊ぶ蛙かな」は蕪村の句なり。これは苗代田の四角に青きを色紙に喩へ、歌よむと貫之のいへりし蛙を配合したるなり。色紙の歌書く者なるは云ふ迄も無し。

○第十問 分類中にある左の句は何の意味なりや。又何と讀むや。

下々も下々下々の下國の涼しさよ 烏 石

答 俳句分類の中に此句を載せたれども作者「一茶」と明かに記せり。烏石とは何の事ぞや。下々は「けい」と讀み、下國は「けこく」と讀む。下等の下等の最下等の國といふ事なり。下々の語は宗鑑の狂歌に「とまりて行くは下々の下の客」とあるより出づ。越人の句に「下々の下の客といはれん花の宿」ともあり。

○第十一問 廣告に俳諧三佳書とあるは何々の書なりや。説明ありたし。

答 猿蓑、續明烏、五車反古の三書なり。猿蓑は元祿の粹を抜きたる者、吾人の始めて眼を開きたるは實に此書の賜なり。後二書は天明前後に在りて比類無き好句集にして、吾人が天明なる新俳想を搜取するを得しは全く此二書の媒介に因る。三佳書と名づくる所以なり。

附 記

一、七小町の内二小町を知らずといひけるに紫影、江戸庵諸氏報じて曰く清水

小町、山本小町と。

一、素月氏報じて曰く零餘子は長薯の蔓になる者故我地方にては長芋小僧とも申候。

(八)

○第一問 連句の法則を問ふ。

答 連句の法則は古の俳人がやかましく吟味せしため種々の面倒を生じたれど、併し全く一定したる者にはあらで、各人によりて手心の緩嚴に甚だしき相違あり。芭蕉の關係し居る連句には殊に破格の例多し。されば連句の法則なる者は何處ら迄遵守すべきかは只其人の考に任すより外に道なけれども、普通と思はるゝだけの法則をこゝろみに左に擧げんか。

歌仙(三十六句にて完結するもの)

- 第一句(季)
- 第二句(季)
- 第三句 ×
- 第四句(雜)
- 第五句(月)
- 第六句(秋)
- 第七句(秋)
- 第八句(雜)
- 第九句(雜)
- 第十句(雜)
- 第十一句(雜)
- 第十二句(雜)
- 第十三句(月)
- 第十四句(秋)
- 第十五句(秋)
- 第十六句(雜)

表六句

第一句を發句又は豎句といふ春又は秋ならば
同季三句續き夏又は冬は二句なり
第二句は脇ともいふ句尾を名詞にて結ぶ
第三句の句尾は『て』『に』『らん』『もなし』にて
結ぶ

裏十二句

第五句月の定座なれども發句秋ならば月も初
三句の中に繰りあぐべし
表六句には神祇釋教戀無常疾病地名人名述懐
等に關する句を禁ず
第十三句の月は夏の月又は冬の月としてもよ
しすすれば同季二句續くのみなり

- 第十七句(花)
- 第十八句(春)
- 第十九句(春)
- 第二十句(雜)
- 第二十一句(雜)
- 第二十二句(雜)
- 第二十三句(雜)
- 第二十四句(雜)
- 第二十五句(雜)
- 第二十六句(雜)
- 第二十七句(雜)
- 第二十八句(雜)
- 第二十九句(月)
- 第三十句(秋)
- 第三十一句(秋)
- 第三十二句(雜)
- 第三十三句(雜)

名残表
十二句

戀は二處ばかりありても善しといひ又戀の句は二句續くべしなどいふそれは何處へ入れても宜し

神祇釋教の句も一句は欲しといふ人あり

名残の表は連句の遊び處といひて少し下品なる言葉なども苦しからず縦横に變化を逞くする處なりといふ

名残の表の雜と記したる中には夏又は冬の句一箇處位はあるべしそれは一句にても二句續きても宜し

一卷(歌仙ならば卅六句を一巻といふ)の内
に月の定座三あり花の定座二あり月の定座は

名残裏
六句

繰りあけたる場合多し

- 第卅四句(雜)
- 第卅五句(花)
- 第卅六句(春)

右大體の法則なれども必ず之に従はざるべからずといふにあらず。此外何句去といふ事あり、例へば木と草と二句去といふは木の句ありて後二句の間は草の句を詠まれずといふ事、同季五句去といふは春の季ありて後五句の間は春の季を詠まれずといふ事の類他は推して知るべし。此等の法則は畢竟變化を貴び重複を嫌ふより起りし事なれば連句の上に必要なるはいふ迄も無けれど、併し二句去三句去などいふ細則に拘るべきにあらず。法則に二句去とありたりとて三句目に同趣味同種類の者を連ねなば終に變化の原則に戻りて面白からぬ結果を生ずべし。連句はどこ迄も變化を主として作るを要す。(句と句との附具合は古例を見て知るべく、猶俳諧大要にも少し説明し置きたれば参照あるべし)

○第二問 左の句説明を乞ふ。

一八 やしやが父に似てしやがの花 蕪村

答 一八は初夏に咲く草花にて、しやがの花と花自身は異なれど全體の趣は相似たる者なり。上に『しやが父』とあるは下の『しやがの花』に掛け合せたる事勿論なるが、其言葉は萬葉卷九にある。

鶯のかひこの中に、ほととぎすひとり生れて、しが父に似ては鳴かず、しが母に似ては鳴かず云々。

といふ歌に依れる者なり。こゝに『しが父』といふは己の父といふ事なり。蕪村が『し』といはずに『しや』といひしは此訓もある事にや知らず。とにかく此句の主意は一八としやがとが多少相似て多少相似ざる處をいひし者ならん。

○第三問 俳句を觀するに畫的に觀すると情的に觀すると何れか適良なる方法なりや。(但吾畫的とは、或句を見て先づ如何なる形容を印象するかと考へ、印象せる形容の巧拙によりて何句の價值を定むる事にて、情的とは、先づ如何なる情致

を含むかと考へ、感得したる情致の厚薄により其句の價值を定むる事にて、此質問の主意はつまり俳句は叙景を主とすべきか抒情を主とすべきかの點を明めたきなり)

答 俳句には叙景を主としたるもあるべし、抒情を主としたるもあるべし。叙景を主としたる句は叙景の巧拙に因りて句の價值定まり、抒情を主としたる句は抒情の巧拙に因りて句の價值定まる。併し句の價值は初めよりこれは叙景か抒情かなど考へて、而して後に分るものと思ふは甚だ誤れり。巧拙美醜は一見端的に知るべし、只其美醜巧拙の由つて來る所を考へ求むれば叙景の巧拙にもあるべく抒情の巧拙にもあるべく語句の巧拙にもあるべきを知らんのみ。

○第四問 詩(俳句なども含む)を學ぶには審美學を修め度先づ如何なる書に依るべきや著者書名御知らせ被下度。

答 審美學を讀んだとて詩が上手に作れる者に非ず。若し詩の趣味が全く解せら

れざる時に審美學を讀まば却て執著の弊を生じて宜しからぬ事もあるべく思はるされど理窟多き性質の者には此の如き考起りがちなる者にて、又此種の人には此種の研究亦必要なるべし。我も十年前は箇様なる妄想に耽りし一人なりしかば、審美學の書物見たしと思ひ丸善などをあさりしに審美の書めきたるは一冊も無し、わざわざ外國にある人のもとに頼みやりて、何か審美學の書物をといひしに、ハルトマンの審美學をおこしくれたり。嬉しさに其本を携へて獨逸語を知る友人の許へ行き、初めより一字一句とみてもらひしが、さて字義ばかりは分りても、分らぬは全體の意義なり、二三夜通ひて二三枚讀みしが少しも分らぬに呆れはて、終に其儘に打ち棄て置きたり。然るに其後のしがらみ草紙にハルトマンの審美學譯を載するの廣告あり。此時もいたく喜びて、急ぎ買ひ讀みしに、再び失望したりぬ。しがらみ草紙の譯は原書を一字々々譯したる者故、譯の正確なると同時に、原書にて分らぬ一章一節の大意は譯文にても一樣に分らぬなり。吾はしがらみ草

紙を抛ちし以後再び審美書を手にはせざりき、又之を見んと念も以前の如く切なざりき。蓋し我一度研究せんと思ひ立ちし純正哲學の基礎に疑を生ぜし以來、我が美の趣味の捕撿に一步を進めたりと自ら信ぜし以來、此審美學の基礎にも疑無きを得ざるなり。若し審美學者が一個の標準を標準として論じたる者ならば、彼の標準が我標準と撞著したる時我は彼に従はざるべからざるの義務あるに非ず、若し又彼が古美術家の標準を標準として論じたるものならば、我は此種の知識を得んが爲めに、空論者の朦朧たる媒介に依らんよりは、寧ろ實物が精確に直覺的に與ふる所の美を感受するの利を思へり。とにかく美術家は審美學者に資する所多くして、審美學者は美術家に資する所甚だ小なるを悟りしより、我は審美學の研究を好奇心の部に入れて、復必要の部には入れざりき。若し我に審美學の必要あらば、他人の審美學を骨折りて讀まんまでもなし、我自ら自己流の審美學を創設するの容易なるに如かずとさへ思ひたりぬ。こは横道の懺悔談なれども、右

の如き上慢心を起し、我は、右の次第にて審美學の研究足らねば著者も書名も知つたものにあらず。獨逸には審美の書多しと聞く、其道の學者に尋ねらるべし。近時一二の小冊子の邦文にて書けるもありと聞けど讀まねば價値の如何は知らず併し十年前に讀めざりし如く今も猶讀めざるを恐るゝなり。呵々。

○第五問 試に『新俳句』に入れる句にして古人の句に類似せる者の二三を擧ぐれば左の如し。これは編者の知りつゝ入れし者にや但しは知らざりし者にや。併せて句の優劣を問ふ。

小坊主の門に立ちけり	秋の暮	関	更
門前に小僧立ちけり	秋の暮	把栗	
夕立に水呑む鯉のあたまかな	嘉	定	
夕立に打たるゝ鯉のあたまかな	子	規	
二三日内にも居らず	猫の戀	舍	羅

一戀猫の戻らぬ二日三日かな 松 宇
答 選者の粗漏なるべし。優劣はいろいろあるべし。

(九)

○第一問 左の句を説明せよ。

五位 六位 色 こきまぜよ 青 簾 嵐 雪

答 昔の大寶令に定めたる服制に據れば、四位は深緋、五位は淺緋、六位は深綠といふ服色なりしが、後に一條天皇頃よりは四位以上皆黒色となり五位が蘇芳と變り六位以下皆縹ハナダとなりきとなり。嵐雪の句は源氏物語若紫の卷より出づ。同じ卷に、源氏始めて紫の君を奪ひて二條の殿の西の對に移し給ひし時紫の君端居して庭など眺め給ふ有様を記して、

立ち出で、庭の木立池のかたなど覗きたまへば霜枯の前裁繪にかけるやうに面白くて見も知らぬ四位五位こきまぜにひま無う出で入りつゝけにをかきま所かなとおほす

とあり。知らぬ人を四位五位と見定むる事服色の外に據り處もあるまじければ黒袍の人と赤袍の人とを見て斯くはいへるならん。こきまぜは『柳櫻をこきまぜて』などいへる如くうちまぜたる意にて、こきまぜも黒色と赤色との色の配合なればこきまぜといふ語を用ゐたり。嵐雪は四位五位を五位六位としこれに青簾を添へつまり赤と縹と緑と三色の配合となしたり。繪は色によつて成る者色は繪によつて現さるゝ者にして、俳句などにて色を現すは極めて難事に屬す。されば古より雪と鴉の配合、鶯と鴉の配合、松杉と紅葉の配合の如き簡單なる配合はあれども三種の色を配合したる俳句は見當らず。此點に於て此句は珍しき句にして且つ成功したる句なり。但粉本既に源語にある上は其功績の一半は之を紫女に歸せざるべからず。(嵐雪の句の青簾は尊き御殿の青簾にして、なみくの家の青簾に非ることいふ迄も無し)

○第二問 碧梧桐先生の續俳句評釋中

高土手に鶉の鳴く日や雲ちぎれ 珍 碩

右の句中鶉は『ひよ』と讀む、鶉の事にして高土手といへば高い木も想像される、と申され候へども元來鶉と鶉とは相異なる鳥と被存候。鶉(ひわ)は雀よりも小さく全體黄色にて少く青を帯び脊翅に黒を交へて尾も亦黒く腹は黄色に嘴は灰白、善く囀る鳥に候。又此鳥は高い木の上よりも寧ろ刈田の堅い處又は土手の上などにある事多く候と存候。如何のものにや。

答 鶉と鶉の異なる事論無し。著者が例の杜撰を申しけるよ。

○第三問 單に或概念と概念とを連接したるのみにては詩と申されぬは勿論に候はんが例へば子規子

庭の菊 天長節の蕾かな

の句は庭の菊と天長節と蕾とを連ねしだけにてそれも布置配合の妙あるにあらねば些の美感を與へぬやうに思はれ候。同じ事にも末五「蕾みたる」と動詞にして見たる方如何に候か。

答 美感が起るか起らぬかは固より見る人の感ずる事なれば議論のしやうも無き譯なれども「蕾みたる」と改めたる手際によつて問者の嗜好は大方に察するを得たれば一言し置くべし。質問中布置配合とあるは何の事が分明ならず。或は布置とは言葉の位置にして「菊の蕾」といふべきを「天長節」にて中斷したるが惡しとの事かと思はる。成る程此句は天長節といふ六音の詞を無理に入れたる故窮屈な句となりし次第なれどもさりとして「蕾みたる」として面白き句となるべきかそれは疑問なり。蕾を名詞にするとも動詞にするとも配合の上は何の變化も起らねば、布置の上にくらかの妙を加へたりとの問者の考なるべし。此淺薄なる寧ろ誤りたる

考は俳句を善く知らざる人には普通のことにて是は第一に散文的たらしめ第二に主觀的たらしめんとするに外ならず。「蕾かな」にては何やら窮屈に整はぬやうなれば「庭の菊天長節を蕾みたる」とでも改めなば言葉つき自然になりて宜しからんと考は即ち俳句をして成るだけ散文的文法に従はしめんとの謬想より起れるなり。韻文が美を現すに必要な場合には散文的文法に一致せざる結果を生ずるは珍しからぬ事にてそれがためにあながち俳句の價値を落すにもあらず。韻文の妙は往々言葉の窮屈なる處文法に外れたる處にあるなり。第二に「蕾かな」といふは客觀的にして「蕾みたる」といふは主觀的なり。前者は蕾の形と色とをいひ後者は菊の未だ開かざる事を意味す。詳しくいへば前者にも主觀的の聯想裏面に在り後者にも客觀的の聯想裏面に在るべきもそは主なる見所にあらず。主觀的即ち「蕾みたる」といふ句を平たくいはゞ「内の菊は天長節にはまだ蕾だよ」といふ事になり、客觀的即ち「蕾かな」の句を平たくいはゞ「天長節に蕾の菊を見て居る」といふ

事になる。どちらが善きかは姑く置く、我は主観的の方の趣向が俳句初心の人に起り易き事を明言するなり。初心の人の句を以てあながちに悪しといふにはあらねど、初心の人は客観的の観察精細ならず従つて客観的趣味に於て缺くる所あり、例へば菊といへば菊の花盛を最観るべきの時とのみ思ひ、蕾又は枯菊も花盛に劣らぬ趣味(或は之に勝る趣味)ある事を解せざるが如し。此客観的趣味の缺乏あれば従つて刺激の烈しからざる客観的即ち菊の蕾の如き者に向つて美感を起さざるは自然の結果なり。我句は餘儀なき句にて少しも愛すべきにあらねど此質問の起りしを機として主観客観を比較し、「蕾みたる」といふ句が毫も原作に勝る者に非る事を信する旨を答へ置くなり。

○第四問 冬季に入りて後の紅葉は冬紅葉と詠まざるべからざるか。

答 さる事なし。紅葉は秋晩冬初のものなれば只紅葉とばかりにて宜し。されど冬紅葉と詠むも勝手なり。

(十)

○第一問 余は俳句を獨學せんとす、如何なる順序を以て獨學せば善きや、又其に伴ふ良書あらば發行所と書名を御教へ被下度候。

答 箇様な問は問ふ人は始めての事なるべけれど答ふる方にてはうるさく感ずる程なり。俳句を學ぶに順序も何もいらぬ事なれど、強ひてそれを聞きたくば俳句入門、俳諧大要でも見るべし。

○第二問 短冊の認め方に就き要する心得を問ふ。

答 心得とて別にあるべくもあらず。只見よきやうに書けば可なり。字の巧拙は別として、其外に注意すべきは、字の位置と、墨の濃淡となり。併し位置は一定したる者にあらねば一行にも二行にも三行にも其外如何やうにも書くべし。墨の

濃淡とても、俳句ではどこで墨つぎするなどいふ事歌の如く定まり居らず。善き加減をはからひて墨をつぐべし。

○第三問

十に足らぬ子を寺へやる寒さかな 子 規

右の句に就いて三説あり。甲はいふ、寺へ使にやるなりと。乙はいふ、寺子屋へ通はせるなりと。丙はいふ、子を寺にやりて小僧にせるなりと。右三説の中いづれか正しき。教を乞ふ。

答 作者は丙説の如き主意にて作りたるなり。

○第四問 最多く美を含む俳句は純客観の句なるやに承知す。若し然らば自己の

作句に主観を含む時代は尙幼遅なるものによ。

答 『最多く美を含む俳句は純客観の句』なりなどいふ事大間違なり。美不美は主観と客観とに關係せず。

○第五問 主観句と客観句との區別を問ふ。(下略)

答 客観句とは見たまゝ聞いたまゝをいへる句なり。主観句とは作者の考(知識にても感情にても)を述べたる句なり。

清水 濁れ 柳 散り 石と ころく 蕪 村

右の句は見たまゝをいへる者なれば純客観の句なり。

どう 見ても 雪程 黒きものはなし

右の句は理窟をいへる純主観の句なり。

夏草 やつは もの どもの 夢の 跡 芭 蕉

右の句にて『夏草や』とあるは見たまゝの景色なれば客観的なり。『つはものどもの夢の跡』とあるは作者の感慨を述べたる者なれば主観なり。されば此句は客観と主観と雜りたる者にて純主観にも純客観にもあらねど、主観の部分多き故に只主観句とのみもいひならはせり。

しぐるゝや黒木積む家の窓明り 凡 兆

右の句にて「作者家の中にあらば主観句となり作者家の外にあらば客観句となるか」との問なれども、此句はいづれの解に従ふも客観句にして主観句とはならず。もつとも作者家の中にありて黒木は其時目に見えぬものとすれば其處にいくらかの主観ありといふべけれど、普通にはさる細かき處迄いふ必要なければ、此の如きはおしなべて客観句といひて差支へなかるべし。

葱買うて枯木の中を戻りけり 燕 村

右の句に就いても前同様の問あり。此句を作者自身の事とすればいくらか主観的になるはいふ迄もなけれどさりとて之を主観的といふ程には主観多からず。葱も枯木も固より客観なり。「買ふ」と「戻る」に主観の部分あれどもこは現在の行爲なれば半ば客観的にして、「つはものどもの夢の跡」といふが如く全く主観的の者とは同様に論ずべからず。要するに純主観といふ句は極めて稀にして多くは主観一

客観まじりたる者なり。其中にて主観の部分多ければ主観句と稱し客観の部分多ければ客観句と稱すれど、そは各人の手心なれば多少の異同は免れざるべし。附けていふ、俳句に純客観といふ句も餘り多からざれど、それよりも主観句（即ち主観の部分多き句）といふべき句は猶稀なり。俳句の多くは客観八九分に主観一二分を交へたる者なるべし。

○第六問 子規子著芭蕉雜談及び獺祭書屋俳話は何れの出版に候や。其他俳諧叢書の外に著書有之候は、御示し被下度候。

答 芭蕉雜談は増補獺祭書屋俳話の中にあり。獺祭書屋俳話は日本新聞社の發行なれども今は品ぎれなり。外に我著書無し。

○第七問 俳句にては風を初冬に置きたり、されど實際に徴するに風は冬全體を通じて吹く故に冬の雜として然らんと思ふ、如何。

答 風は木を枯らす風なれば初冬の風なり。若し冬の風を風といはんとならば定

義の變更に就いて文學界の承認を要す。

○第八問

金欄の袈裟ふかれ行く花野かな 梅室

といふがあり、初五に少しく厭味はあれど想に於いてはあしからぬ句と思ふ。如何。

答 初五に厭味なし。寧ろ金欄と花野とは調和すべし。「ふかれ行く」に大なる厭味あり。袈裟とばかりいひて僧といはざる處にもいくらかの厭味あらん。

○第九問 烏雲に入るとは如何なる事にや。

答 北地に歸る鳥の遠く飛び去る様をいふか。

○第十問 審美的にあらざる俳句は俳句とならざるや否や。

答 不思議なる言葉を聞く事かな。そも「審美的俳句」とは如何なる俳句やらん聞きたきものなり。字面にて考へても分るべし、審美とは美を審にするとありて美

といふ事を研究する事なり。されば「美を審にする俳句」といふ事は何の意味をもなさぬ言葉なり。知つた風な事いふて人に笑はれぬやうすべし。

○第十一問

桐の木に鶉鳴くなる 堀の内 芭蕉

右の句説明ありたし。

答 譯の分らぬ句なり。

(十一)

○第一問

あかくと日はつれなくも秋の風 芭蕉

芭蕉、風を山にかへて北枝に示せしに、北枝、風の方善き由答へしかば、芭蕉其

俳才に驚けりといふ。如何なれば山より風の方善きか。

答 『あかく』と日はつれなくも』といふ句吾は少しも趣味を感じず。故に秋の山とするも秋の風とするも面白からず思ふ。

○第二問 草市とは何ぞ。

答 草市(草の市とも)とは孟蘭盆の魂祭の道具を賣る市なり。東京にては大道の傍に露店を出して、燈籠、苧がら、蓮の蕾、鬼灯、鼠尾萩、竹、荒薦、小茶碗、茄子の馬、青瓢、千なり鬼灯等魂祭に必要な者は總て之を賣る。もつとも露店はいくつも並びてあるなり。晝の市も夜の市もあるべし。

○第三問 新蕎麥とは舊曆七月頃早熟の物を販ぐをいひて蕎麥切のことにはなきにや。季寄類には見えす。されども五百題八百題やうの書には秋季に蕎麥切とせし句數多見えたり。何れを探りてよかるべきか。又蕎麥刈を秋とし冬とせし説あり。秋冬何れに據るべきにや。御教示を乞ふ。

答 新蕎麥は其年出來し蕎麥の意なれば喰ふと喰はざるとに拘らざれど、蕎麥の事故多くは喰ふ事に用ゐたり。蕎麥刈は實際蕎麥を刈る時を季とすべし。若し秋晚にも初冬にも刈らば兩季に跨がりし者として宜し。蕎麥刈を冬季として新蕎麥を秋季とする理に合はずといふ説あり。新蕎麥も實際冬に入りての事ならば冬季に入れて宜し。要するに箇様の事は法を實際に取るべく、古人の規則に拘るべからず。若し又類題の上に秋と冬とを分つ場合などには秋にても冬にても各の好む通りに定めて可なり。

○第四問

山 陰 の 木 槿 は 白 し 酒 帘 鳳 毛
酒帘とは何ぞ。

答 酒帘は『さかばやし』と讀む。酒屋の看板に杉葉を丸くしてつりたる者即ち『さかばやし』なり。『ばやし』は『望子』といふ漢語の訛にて『さかばやし』は『酒望子』なり。

りといふ説なり。漢語にて酒帘といふは酒屋の旗なれど日本にては酒屋に旗立つる事なければこゝも杉葉の事と見るべし。

○第五問

帛を裂く琵琶の流や秋の聲 燕村

右の句説明を請ふ。

答 これに蕪村が宇治に遊びし時の句なり。こゝに『琵琶の流』とあるは琵琶湖の流といふ事にて即ち宇治川をさしていふなり。白樂天の琵琶行に四絃一聲如裂帛とあるは琵琶の音の形容なるが、蕪村は其語を借り來りて樂器の琵琶と琵琶湖とを掛け合せ、川の水音の形容を『帛を裂く』といひしなり。『秋の聲』といふは其水音の淋しき悲しきやうなるを以ていふのみ。

○第六問

人の世に朝顔白う咲きにけり 牛伴

の句意如何。

答 世俗一般に華美なる色を好むなるに、白朝顔の獨り白く咲きたるは世に媚びずして珍しとの意ならん。

○第七問 添水とは何ぞ。

答 添水は『そうづ』と讀む。元は『そほど』(會富騰)といふ語なり。『山田のそほど』といふは案山子をいふ。それが中世以後に至りて『山田の僧都』と書かれたるは案山子が坊主に似たる故にもあるべし。然るに俳句にては更に一轉して『添水』の字を用ゐるのみならず、其意義も亦變じて最早案山子の事をいはず。田舎に水流を借りて自然に確春かす者あり。固より水車の如き大仕掛にはあらで、箱の如き者に水満つれば其箱低く下りて水をこぼす、水こぼるれば又元の如くはぬ上る、其時、杵動きて白をつく、これ俳句に所謂添水なり。併しそれだけの事ならば此語が案山子より轉訛する筈はなけれど、添水は絶えず音を發する者故夜間は鹿など

此音に驚きて近よらず。即ち案山子鳴子等と同一の働きをなすなり。併し此器はもと鹿驚しを主として作りたるものか、或は臼をつく事を主として作りたるものか知らず。知りたる人は教へたまへ。

○第八問

われ見ても九人はむなし角力取 蓼 太

右の句意は如何。

答 十人の内九人死んだといふ事なり。我見知りたる角力取は大方死にたりとの意。『われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代へぬらん』といふ古歌の『われ見ても』といふ語を借り來りたるなり。

○第九問 ほととぎす第三卷第二號の俳句分類『神』の中神樂の句なきは如何。

答 『かぐら』といふは語原を知らねど此語の内に『かみ』(神)といふ語は含まれ居らず、神樂と書くは意味の上より來りし事と思ひ、神樂の句を省きしなり。『みこ』

し』も神輿とは書けど此國語の中に『かみ』といふ語含まれ居らぬ故これと同じく省きたり。(自明治三十二年四月至三十三年三月ほととぎす掲載)

四
年
間

俳句問答終

俳句問答

二九八

四年間目次

第一篇	明治二十九年の俳句界	一
第二篇	明治三十年の俳句界	二七
第三篇	明治三十一年の俳句界	二五
第四篇	俳句新派の傾向	二三
第五篇	明治三十二年の俳句界	一五八
附 録		
俳社一覽表抄		一六四
俳人一覽表抄		一六六
附 録		

一 内藤鳴雪……………一六九

二 五百木飄亭……………一七五

三 河東碧梧桐……………一八三

四 高濱虚子……………一九六

四年間

瀬祭書屋主人著

第一篇 明治二十九年の俳句界

(一)

明治二十八年の暮より漸く世人の注意を惹きたる俳句は明治二十九年に入りて幾多の評家を驅り之が批評を試みしめたり。曰く俳句は文學に非ず。曰く俳句は文學中の下等なる者なり。曰く俳句は多量の材料、複雑なる人事を詠する能はず。曰く俳句は俳句専門の套語ありて一の符徴の如き者なり。曰く俳句は過去の歴史に於て見るべき一種の文學にして未來の文學として研究し作爲すべき者に非ず。曰く俳句は云々せざるべからず斯くくくなるべからず。然れども俳句は終に文學

として價值少きものなり。評家の言ふ所概ね此の如し。たまくに俳句の餘韻を説き輕快を賞し俳句辯護の位置に立つ者無きに非るも并は多く俳句作家の徒にして其聲割合に低く、喧しく聞ゆる所の者は讒謗罵詈、頭こなしに俳句を排斥せんとするの聲に非れば則ち多少の理窟を並べて俳句の價值無きを論ずる者なり。蓋し此の如く批評百出せしは新奇なる論題を得て評家が自己の伎倆を示したるにもあるべけれど又俳句が他の一面に勢力を得て漸く興らんとするの傾向ありしを證するに足るべし。若し吾人をして此間に於ける各評家の心中を揣摩するを許さしめば中には恐怖に驅られ嫉妬に催され或は不意を喰つて狼狽したる者もありしが如し。一事一物の暗黒界を出で、世に現れんとする時攻撃四方に起り評家或は其新事物の擡げんとする頭を壓して擡げ得ざらしめんとすること珍らしき現象に非ず。然れども由來文士の一顧だに値ひせざりし俳句なる者が此時に於て此運命に遭遇せんとは吾人の豫想せざりし所なり。

日本が世界列國の間に押し出して日本帝國たる者を世界に認めんとするには日清戦争は是非とも必要なりしなり。日清戦争は初めより此目的を以て起りたる者に非れども少くも此大勢は日清戦争の端を開かしむる上に於て暗々裡に之を助けたるや疑ひ無し。事の大小こそあれ俳句が文學界に出でんとするには勢ひ此攻撃と軋轢とは免れ得ざる所なるべく又此攻撃軋轢は終に俳句なる者を世間に承認せしめたること日清戦争の日本に於けると異なる事無し。文壇に於ける戦争の結果は固より劍戟の下に雌雄を決するが如き劃然たる勝敗を示す者に非ずして兩々相執つて下らざるを常とす。俳句の攻撃辯護に於けるも亦直接の勝敗を見る能はざりしと雖も事實の上に於ては俳句稍勝を制したるに似たり。見よ昨年に於て諸新聞雑誌が頻りに俳句を載せ初めたることを。是れ俳句の簡單にして登載に便なるに因るとは言へ俳句にして文學と認められずば誰か好んで非文學的の兒戯を新聞雑誌に載せんや。俳句の價值にして或る人の言へる「軍夫の軍屬たるが如く僅か

に文學的なる者」と信ぜられれば誰か好んで此軍夫的文學を載せて徒に不名譽を買はんや。要するに俳句は或る一部分より排斥せらるゝと同時に他の一部分より歡迎せられたるは掩ふべからざる事實にして其味方を得たるは言ふを待たず敵を得たる事も亦俳句界のために一の光榮を添へたる者といふべし。况んや俳句に對する批評の如きも初は俳句全體に就きての攻撃なりし者後には漸く特別なる俳句(或る一句又は或る一種の句)の批評(多くは攻撃)と變じたるを見る。是れ俳句は文學上に多くの價値を有せずと反對者より論斷せられ乍ら猶ほ時に之に對する批評を試みるだけの價値を認められたる者なり。曩時の絶對的攻撃の如きは俳句が文學の戸籍に上るために必要なる登記税と見て可なるべし。以上は外に對する二十九年俳句界の現象なり。さて内に於ける現象は如何。是れ吾人の主として述べんと欲する所なり。

(一)

外面よりの批評は必ずしも内部の著作を促す者に非ず大作家好著述の現出は必ずしも批評界と關連する者に非ず。然れども天下の大勢は自ら大作家の勃興、好著述の製作と關連する所深くして而して批評は天下の大勢の幾分を形作る者たるを知らば、批評は間接に文學著述の上に影響すること少からざるべきなり。少くとも批評が一時の流行と密接の關係を有する事は誰も認めざることを得ざるべし。』

『昨年俳句界に於ける外部の現象を見れば第一、諸新聞雜誌等に俳句を載すること、第二、諸新聞雜誌等に俳書を評論すること、第三、俳句作者及び俳句會の増加したること、第四、俳句の出版翻刻、俳諧専門雜誌の發行等に於て其擴張を證せり。此現象は日々の我紙上亦之を報道せしを以て一々事實を擧げてこゝに再び繰り返すの煩を爲さざるべし。』

外部の現象は一時の流行を示す者にして其時に於てこそ意外に世人の注意を喚起する者あれ後世よりして見れば固より俳諧史上の一瑣事として注意するだけの價

値だにあらざるなり。之に反して俳句内容の變化發達に至りては今日に於て之を知り之を評する者の少きだけそれだけ俳諧史の上には極めて必要な現象として後日之に重きを置かるゝや必せり。吾人は寧ろ外部の景況を觀察するを止めて内容の變化を研究するの有益なるを信ず。只多少の關係を免れざるために特に參考の材料として外部の形勢の大略を言ふのみ。新聞雜誌の俳句を載すると否と、世人の俳句を文學視すると否とは直接に吾人に影響する所無し、批評家之を非なりとし新聞雜誌之を非なりとし滿天下皆之を非なりとするも吾人之を是なりとする間は吾人は進んで之を研究すべし。批評家之を是なりとし新聞雜誌之を是なりとし滿天下皆之を是なりとするも吾人之を非なりと知る上は之を捨てゝ退くべし。吾人は文學の研究に關しては毫も世と共に推移するの必要を認めず。吾人は唯同志の者と共に進み又同志の者と共に退くあるのみ。

二十九年中に製作せられたる俳句が一般に前年に比して進歩したるは著き事實な

り。併しそは新聞雜誌等に記載せられたる俳句を通覽して知るべきものにして、單に程度の上に於ける進歩は二三の例句を以て證し得べきに非ず。然れども俳句の意匠(言語は後に言はん)の種類の變化は一二句を擧げて猶ほ且つ其の相違を見るべし。例へば

古池や蛙飛び込む水の音 芭蕉

柳散り清水涸れ石とこころぐ 蕪村

の二句を比較して兩俳家兩時代の觀念の如何に變化せしかを知るべく、

蚊帳ごしに鬼を答うつ今朝の秋 蕪村

元日や鬼ひしぐ手も膝の上 梅室

の二句を比較して兩俳家兩時代の理想の相違如何に甚だしきかを知るべし。蕪村の柳散の句の如き材料多く印象明なる者はたまく芭蕉が作らざりしに非ずして芭蕉時代には未だ此種の工夫を爲し得ざりしなり。芭蕉は此の如き句を嫌ひて作

らざりしに非ずして此種の觀念を毫も有せざりしなり。梅室は蕪村の後に出てたる者まさかに蕪村の句を知らざりしにも非るべけれど蕪村の句が含みたる趣味を解し得ざりしなるべし。蕪村は梅室の前に出てたりといへども梅室の元日の句の如き俗趣が俗世間の喝采を博するに足ることは知りたるべく、知りて爲さざりしは以て蕪村の意向を窺ふに足るべし。昨年俳句が稍蕪村流に傾きたるは一變化として見るべしといへども、古人が既に變化した得る範圍内に於ての變化は俳人各個の上こそ著き變化ともなれ俳諧史の上より見て只古の變化を繰り返すに過ぎざるなり。而して吾人は又昨年俳句界に於て今迄會て有らざるの變化ありしことを認むる者なり是れ大に研究すべきの現象にあらずや。

(三)

一個人には一個人の特色あり一時代には一時代の特色あり。明治廿九年以前の俳諧にも亦明治時代の特色無きに非ず。然れども特色は必ずしも異種類の句を謂ふ

に非ずして同種類の句の程度の相異、傾向の多少も猶ほ之を特色と謂ひつべし。明の七子が盛唐の詩調に倣ひたるが如き之を異種類の詩と謂ふべからざるも盛唐の詩の中の或る一種の格調を擇んで特に其種類の詩をのみ多く作りたるは猶ほ唐に區別して明の特色と爲すべきが如し。况んや吾人の作りたる俳句は七子の如く徒に模倣を務めたるにもあらねば多少の特色ありしこと勿論なりといへども更に一大變化を経たる後の今日より見れば當時の特色なる者も異種類の特色に非ずして過半は是れ元祿を摸し天明に倣ひ文化文政に出入したる者に非ざるか。而して昨年の特徴に至りては芭蕉の深遠に非ず檀林の滑稽に非ず蕪村曉臺の蒼健典麗にも非ず白雄閑更の巧緻清婉にも非らず。さればとて成美乙二の流にもあらねば固より蒼虬梅室に似るべくもあらず殆ど全く種類を異にする者なり。此新調は早く幾多の俳人の間に行はれつゝありといへども就中虛子碧梧桐二人の句に於て其特色の殊に著きを見る。二人は又實に此新調を作る原動者たりしなり。故に少しく

二人の句に就きて論ぜんとす。

碧梧桐の特色とすべき處は極めて印象の明瞭なる句を作るに在り。印象明瞭とは其句を誦する者をして眼前に實物實景を覩るが如く感ぜしむるを謂ふ。故に其人を感ぜしむる處恰も寫生的繪畫の小幅を見ると略々同じ。同じく十七八字の俳句なり而して特に其印象をして明瞭ならしめんとせば其詠する事物は純客觀にして且つ客觀中小景を擇ばざるべからず。例

赤い椿 白い椿と落ちにけり 碧梧桐

乳あらはに女房の單衣襟淺き 同

葉雞頭と雞頭とある垣根かな 同

かんでらや井戸端を照す星月夜 同

白足袋にいと薄き紺のゆかりかな 同

爐開いて灰つめたく火の消えんとす 同

妻の手や炭こよごれたるを洗はざる 同

鹽の雪更に霰の吹きたまる 同

椿の句の如き之を小幅の油畫に寫しなば只地上に落ちたる白花の一團と赤花の一團とを並べて畫けば則ち足れり。蓋し此句を見て感ずる所實に此だけに過ぎざるなり。椿の樹が如何に繁茂し如何なる形を成したるか又其の場所は庭園なるか山路なるか等の連想に付きては此句が毫も吾人に告ぐる所あらざるなり。吾人も亦之れ無きがために不満足を感じずして只紅白二團の花を眼前に覩るが如く感ずる處に満足するなり。乳あらはにの句は女の半身像と見て可なり。是れ亦特種の妙味あるに非ずして普通の事を上手に寫したる者なり。かんでらの句は星月夜の大觀に反映せしめながら猶ほ一人かんでらを執つて井戸端に立つ處四圍暗黒の中に在りて井戸の片側と人の半面とが火に映じて極めて明瞭なる印象を生ずるを見る。白足袋の句に至りては瑣事中の瑣事、小景中の小景にして畫も寫すこと能は

ず俳句も亦今迄斯ばかりの小事を詠じたる事無し。爐開と妻の手との二句の如き些の主観を交へたりといへども其主観は複雑なる高尚なる主観に非ずして目前の客観より直ちに無意識に連想し得べき主観的の觀念なれば之あるがために印象の明瞭を妨げず。(やゝ複雑せる若しくは抽象的なる觀念例へば「必」と言ひ「思ひ」と言ふが加き意を加ふれば印象の明瞭を缺くこと論を俟たず) 碧梧桐の句必ずしも此の如く小景的の者のみに非ざれども極端を取つて説明すれば説明し易きを以て特に此等の句を挙げたるなり。

(四)

印象の明瞭なる句を作らんと欲せば高尚なる理想と茫漠たる大観とを避け、成るべく客観中の小景を取りて材料となさざるべからざること既に之を言へり。印象の明瞭といふ事は美の一分子なれども一句の美を判定するは印象の明不明のみを以てすべからざること勿論なり。印象の不明なる句の中に幽玄深遠なる者もあり。

印象の明瞭なる句の中に淺薄無味なる者もあり、即ち印象不明なるがために却つて悪しき者さへあるなり。然れども碧梧桐の特色は多く印象明瞭なる處に在り且つ其好むところ亦印象明瞭なる一方に傾くを以て吾人が此に論ずるところも亦此一點に在り。

印象明瞭といふことは繪畫の長所なり。俳句をして印象明瞭ならしめんとするは成るべくだけ繪畫的ならしむることなり。内容に限りある俳句は到底複雑精緻なる繪畫を學ぶ能はざるを以て簡單明快なる繪畫を學ばざるべからず。繪畫に一枝の花、一羽の鳥、數顆の菓物、婦人半身の像あるが如き碧梧桐の俳句と相似たる者なり。此の如き繪畫、此の如き俳句は寫生寫實に偏して殆ど意匠なる者なし。精密に言へば意匠無き繪畫意匠無き俳句はあるべからざる筈にて一枝の梅も數顆の梨も其形狀の上に於て配置の上に於て多小の撰擇と取捨とを要すること勿論なれども他の理想の多き者に比して殆ど意匠無しといふて可なるべし。此意匠無き

繪畫俳句が美術文學の上に幾何の價値を有するかといふは一疑問に屬す。理想に偏する人は此の無意匠の著作を嫌ふて淺薄無味蠟を嚙むが如しと爲す。普通一般の人も亦之を見て何等の興味をも感ぜず。而して此種の繪畫を見て多少の感を起す者は繪畫の技術に經驗ある者と些の知識も無き田舎の爺様婆様の徒を多しとす。(俳句は専門家の感を起す事同様なれども、爺婆を感ぜしむる事能はず。蓋し俳句は文字といふ符號を用うるを以て全く無教育無知識の者を繪畫の如く直覺的に感ぜしむる能はざるなり)爺婆の感ずる所は「あゝ美しい」と感じ「本とうの物のやうだ」と感ずるのみにして専門家の複雑なる感情を起す者と同じからずといへども「本とうの物のやうだ」と感ずる一點に至りては兩者毫も異なることなく専門家の第一要點として見る者亦實に此處に在り。是れ専門家は技術の熟練に感ずる者にして多くは自家の經驗より出づ。之を排斥する者には二説あり。曰く一花一鳥の簡單なる事物は尋常にして無味を免れず、同じく寫生なりとも今少し珍

しき事物、複雑なる事物を寫すべしと。曰く寫生は天然を寫すなり。然れども吾人の美術家に望む所は天然よりも更に美なる者を寫すに在り。美術家は高尚なる理想を寫し出ださるべからずと。

第一説は簡單と複雑との美の比較にして(此説を極論すれば第二説となるべし)説者は複雑を以て簡單よりも美多きものと爲すなり。此事に就きては曾て屢々論ぜし所あるを以てこゝに詳論せずといへども要するに吾人は此説を否定し、複雑なる者の美、必ずしも簡單なる者よりも多からずといふなり。即ち簡單なる者にして複雑なる者より善きもあり。又複雑なる者にして簡單なる者より惡きもあるなり。例へば一株の牡丹を畫く者必ずしも一園の牡丹を畫く者に劣らず、石版摺の楠公父子訣別の圖は必しも抱一上人の一花草の圖に勝らざるなり。

説者曰く子の言必ずしも偽ならず、然れども大體に於て複雑なる者は簡單に勝ると。吾問ふて曰く大體とは如何なる意ぞ。説者答ふる能はず。少頃口を開いて曰

く簡單にも美なる者あり。然れども簡單にして最も美なる者と複雑にして最も美なる者とを比較せば簡單なる者は必ず複雑なる者に劣るべしと。吾曰く是れ殆ど比較すべからざる事なり。美術の價値は比較的の者なれば自ら見たる畫の外に最上の美なる者を想像すべからず、縦し想像し得たりとも其が最上の畫なりや否やを知るべからず。一步を譲りて子の實驗中の畫に就きて之を言ふも子が複雑の方を可とするに反して簡單の方を可とする者もあらん。畫の價値が評者によりて多少の相違あること致方も無きことに固より之を判定すべき法律も無ければ各自の標準を以て判定するより外なけれども吾は複雑を以て簡單に勝るとするの説には賛せざるなり。さりながら簡單を以て複雑に勝るとも主張するに非ず。吾は簡單の美と複雑の美と各特色ありて必ずしも優劣を判する能はずとするなり。只製作の上に於て簡單なる者は變化少く複雑なる者は變化多し。従つて多數の意匠を得ることは複雑なる者簡單なる者に勝れり。是れ數に於て見易き道理にして吾も

之あるを認む。然れどもこれは美の區域の廣狹にして美の程度高低に非るなり。

(五)

第二説は純粹の寫生といふ事を非難するなり。繪畫にして純粹の寫生たる以上は畫家の意匠の上に殆ど見る可き者なく貴ぶべき者なしといへども寫生の技術にして巧ならば其技術の上だけにても人を喜ばしむる筈なり。説者若し寫生の技術を斥けて、是は寫真師の撮影術に巧拙あると一般普通の技術として見るべきも美術として見るべきに非ずと言はゞそれ迄なり。されども撫子の花を畫いて撫子に似たらば實際の撫子を見て起すだけの感は畫を見ても起る筈なり。説者若しそれをも擯斥して、畫にして此の如きものならんには實物を見て足れり、畫を見るに及ばずと言はゞ、これもそれ迄なり。

此種の人多くは畫家に向つて極めてむづかしき注文を爲す人にして其むづかしき注文に合はざる普通の繪畫を以て無用とするなり。其の注文必ずしも惡きに非ず。

或は其注文には最も高尚純潔なる觀念を含むことさへあれば畫家は此の注文にも應じて製作せざるべからず。しかはあれど畫家の翱翔馳驅すべき區域は此むづかしき注文が命令する程の狹隘なる者に非ず。人間が感じ得べき美の種類も或る理想家が感ずる如き特種の者に限られざるなり。

今こゝに一本二本の野花を巧に畫きたる者ありと假定せよ。吾は之を見て美を感ずべし。少くも天然の實物を見て起すだけの感を起すべし。否實物を見るよりも更に美なる感を起すことさへ少からず。是れ其形狀配置の巧なるにも因るべけれど又周圍に不愉快なる感を起すべき者無きにも因るべし。即ち繪畫の材料として美なる者のみを摘み來りしに因るなり。縦し一步を退いて此等の實物以上の感無しとするも繪畫は嚴冬の候に當りて盛夏の事物を見せ得べく一室の中に在りて山野の光景をも見せ得べし。曾て見たる者を何時にても再び見せしむるも繪畫の力なり、未だ見ざる所を見るが如く明瞭に見せしむるも繪畫の力なり。寫生の一

より論ずるも繪畫にして幾多の變化せる天然の美を容易に眼前に現出するの功あらば猶一美術として存すべきにあらずや。況んや純粹の寫生にも猶ほ多少の取捨撰擇あるをや。

然るに或る理想家が全く之を排して無用の者と爲すは其實、天然美の摸寫を以て無能力と爲すのみにあらずして天然其物の美を感ぜざる者多きに居る。一草一木の畫を見て何等の感を起さぬ人は多く實物の一草一木を見て感を起さぬ人なり。此種の人の美と感ずるは多く天然にあらずして人間に在り。天然的に見たる人間にあらずして人情的に見たる人間に在り。即ち人間の美は天然の美よりも多しといふに在り。吾の説は之を否定して人間の美必ずしも天然の美より多からずといふなり。或は忠孝を以て美の極致と爲し或は戀愛を以て美の極致と爲す者あれども吾は必ずしもしか思はず。非情の草木、無心の山河亦た時に之に劣らぬ美を感ぜしむるなり。此の説は略々前の簡單複雜の説と同一致なる者なれば復たこゝに

言はず。天然は多く簡單にして人情は多く複雑なりとの一語を言ふを以て足れりとすべし。

以上主として繪畫に就きて論じたれども俳句に於けるも同じ事なり。吾人は此等の點に於て繪畫を論ずるも俳句を論ずるも其他の文學美術も同一ならざるべからずと信するなり。世人或は文學を重んじて繪畫を輕んずる者あり。或は理想を繪畫に要求せずして文學にのみ要求する人あり。吾人は此等の謬見を破らんが爲めに、且つ印象の點に於て其極端を現さんがために特に繪畫を論じたり。繪畫を詳論したるは即ち俳句を詳論したるなり。

(六)

他の難者あり。曰く印象を明瞭ならしめんがために些事微物を取るも可なり。寫生的に天然を寫すも可なり。只其餘韻少きを以て吾は取らずと。

前に論じたる所は寧ろ俳句全體の非難に關して述べたるが如き者少からず。今此

難者のいふ所は直接に印象明瞭を主とする者に向つての非難にして其意は「事物の小なる者も材料とならぬにはあらねど餘りに小なる者は餘韻無くして面白からず、寫生寫實にも善き句あれども左迄趣味無き事を全く有の儘に寫しては餘韻無くして面白からず」といふに在り。印象明瞭を主とするがために餘韻無くなるは事實なり。然れども餘韻の一點を以て俳句を是非するは印象の一點を以て俳句を是非すると同じく僻論たるを免れず。印象明瞭を主とするの弊が淺薄無味に陥り餘韻を生ぜざるが如く、餘韻を主とするの弊は印象不明瞭にして事物の位置關係等毫も知る能はざる所に在るなり。兩者共に美の要素にして其優劣は判し難きも一を取り他を捨てんことは恐らくは感情の發達せざる人の所爲ならんか。蓋し印象の明瞭を尙ぶ者は形體を尙ぶなり、餘韻を尙ぶ者は精神を尙ぶなり。形體の美は直ちに五官が感得する美なり。精神の美は（初は形體の美より出で來りし者あるにせよ）知識によつて抽象せられたる無形の美なり。五官の美は（程度の多少はあ

れど) 翁婆に至る迄之を感じれども無形の美は知識ある者聯想多き者に限りて之を感じずべし。此故に世人往々餘韻を以て最上の美となす。知識を交へたる美が果して最上の美なるか否か之を知らず。假りに之を最上の美と定めんに、猶ほ形體の美を度外に置くこと能はざるは論を俟たず。餘韻を主とするものも全く形體の外に立つべき者に非れば普通の場合に於て出來得る限りは印象を明瞭にするの必要はあるなり。猶ほ一步を譲りて論ぜんに、少くとも餘韻無き句を評するに當りて印象明瞭を標準として其美を判定するは最も必要な事なるべし。之を吾人の實驗に徴するに餘韻を尙ぶ人は餘韻以外の句を全く惡句として抛擲し復た其所謂惡句中の優劣を見ざる者比々是なり。さるは形體の美に於る感情發達せず従つて之が優劣を判する能はざるなり。故に此種の人多くは文學の美を知つて繪畫の美を知らず、繪畫中極めて少なき部分に向つて同感を表するのみにして或は繪畫なる者を一小區域内に束縛せんとする者也。是れ善く繪畫を觀る者に非ずして則ち

形體の美を解せざる者なり。縱し形體の美なる者が如何に美の一小部分を占め得るだけの者なりとも既に其比較的優劣を知る上は之を以て其製作を褒貶する一標準となすこと固より當然なるべく、否人情として之を論ぜざること能はざる筈なり。其全く之を論ぜざるは知らざるがためのみ。况んや形體の美なる者は殊に繪畫に於ては最も必要な者にして、しかも上世の精神をのみ尙ぶ時代には極めて幼稚に、後世に至り漸く發達し漸く精微に赴く者なるをや。而してある點に於て他の(長篇の)文學よりも寧ろ繪畫に近き俳句は殊に形體の美に注意せざる可からざるをや。上代の繪畫文學が精神の上に發達したるは萬國略々同一軌に出で、其尙ぶべき所は精神の高潔にして餘韻嫻々たる所に在ると共に、却て其模倣するに足らざるは形體の幼稚なるに因る。

人或は言はん、繪畫の長所は文學の短所なり、自己の短所を以て他の長所を學ぶ亦愚ならずやと。長所短所の説固より然り。文學の時間的なるは繪畫の空間的な

ると性質を異にす。故に文學をして空間的たらしめんとするは稍々無理なる注文なり。俳句とても多少の時間を含む所に於て繪畫に超越せりといへども俳句は他の文學に比して空間的ならざるべからざる者あり。蓋し時間は空間の變動に因りて始めて知覺せらるべき者にして時間を現さんとせば是非とも空間を現さざるべからず。即ち繪畫には時間を含まざることあるも文學には空間を含まざること能はざるなり。然るに俳句の如き短き者に在りて時間空間共に之を含ましむること能は分量の上に於て極めて出來難きことなるを以て寧ろ兩者の一を擇ばざるべからざるの必要起る。此必要に應ぜんとするも時間許りを寫すことは出來得べきにあらねば已むなく空間許りを寫すの勝れるを見る。是を以て俳句は時間的の文學に屬しながら却つて空間的繪畫に接近せんとす。俳句が時間を含む能はざるは文學の上より俳句の大缺點として論すべき者、しかも文學中に此空間的俳句あるは亦た以て俳句の特色として存すべき者にあらずや。兎に角に俳句の空間的なる所以

は即ち形體の美に於て特に研究せざるべからざる所以にして、碧梧桐が印象明瞭の句を爲すは俳句の上の一進歩として見るべきなり。

(七)

ある人難じて曰く俳句に印象の明瞭を要すること論を俟たず。然れども印象明瞭なるがために餘韻を失ひては何の面白きことかあらん。又印象明瞭なる句に餘韻無しといふも受け取れぬ説なり。吾は印象明瞭にして餘韻ある句を愛すと。

答へて曰く是れ未だ印象明瞭といふことも餘韻といふことも研究せぬ人なるべし。然らざれば前の難者と同じく餘韻説に傾く人なるべし。然れども餘韻といふ語の意義に就きては各人其解釋を異にするかも測られず。故にこゝに先づ吾人の解釋を述べ置くの必要あり。吾人の所謂餘韻は俳諧に所謂餘情と略同じ意にして一句の表面に現れたる意味の外に猶幾多の聯想を生ぜしむるをいふ、即ち一句を誦し畢りて言外に髣髴たる者を感じるをいふ。餘韻なる語は此意味にて用ゐらる

る者として左に餘韻を論ぜん。

餘韻多き句は如何なる種類の句なるかと見れば大別二種あり。一は主観的の句にして他は廣き空間又は長き時間又は強き勢力を含みたる句なり。餘韻ある主観的の句とは

夏草やつはものども夢の跡 芭蕉

の類にして、吾人は此句を誦すると共に種々の聯想を起すべく、其聯想の中には城跡の荒れたる景色もあらん、甲冑着たる武者の撃ち合ふ處もあらん、義經の末路、辨慶の忠義、人世の榮枯等其他、人によりて思ひ思ひの事あるべし。此句など普通に餘韻多しと認むる句ならんと信ず。然れども翻つて印象の點より此句を見れば極めて不明瞭なること言ふ迄もあらず。此句にて客觀に見得べき者は唯夏草のほうくと生ひ茂りたる光景のみにして、其光景は古戦場の特色をも現さず(普通の平原にも斯く言ふべし)又高館の特色をも現さざるなり。而して主観は無

形の者即ち印象無き者なれば其印象不明瞭は論を俟たず。主観の句にても直ちに客觀と成り得べき者即ち其句は作者の主観を言ひし者なるも讀者が直ちに客觀として其光景を現し得べき者あり。此の如き句は寧ろ客觀に近くして餘韻少く印象明瞭なり。例へば

女具して内裏拜まん春の月 蕪村

の如し。女具して内裏拜まんとは主観なれども讀者は早く已に女具して内裏を拜む所の光景を心中に描くべし。故に「女具して内裏拜むや春の月」と言ひしと相距ること一步にして客觀に近し。然れども「拜むや」と言はずして「拜まん」と言ひしだけは餘韻を深くしたる者にして其代りに印象の方はそれだけ不明瞭となれり。

(此句は「拜まん」と言ひて少しく印象を不明瞭にしたるところに味あり「拜むや」とすれば全く殺風景の句となる。) 廣く空間を含んで餘韻ある句とは

湖の水まさりけり五月雨 去 來

の如し。此句は渺茫なる湖上に雨の濛々たる有様をも想像せしむべく、湖水の平地近く迄増して將に溢れんとする有様をも想像せしむべく、連日梅雨の降りつきし有様をも想像せしむべく、此後如何に成り行くらんと人々の氣遣ふ有様をも想像せしむべし。然れども印象に至りては極めて不明瞭にて只茫々たる湖水を認め得るのみ。其湖水の如何なる湖水なるかそれすら不明瞭なれども、开は普通の感情に訴へて琵琶湖と假定せんも、猶ほ其光景は水と雨との外毫も之を描き出だす能はず。或は大津市街の邊とせんか、或は瀬田の長橋の邊とせんか、或は彦根城雲烟の間に模糊たる邊か、或は湖水草を浸し蘆荻半ば没したる邊か、膳所か、矢走か、唐崎か、堅田か、各人能く自己の經歷より勝手に光景を描き出だし得べきも此の句は毫も之を現はさざるなり。(此の句は空間の外に多少の時間と勢力をも含む)又

時鳥 鳴くや湖水のさゝ濁り 丈 草

の如きも空間的の句にして普通の餘情ありと稱せらるゝものなれども印象の不明瞭なることは前の句と相似たり。

(八)

長き時間を含んで餘韻ある句は

明月や池をめぐりて夜もすがら 芭 蕉

の如し。此句を誦すれば月にうかれて池のぐるりを廻りては廻り廻りては廻りする有様をも想像せしめ、月の晴れ渡りて心地すがくしき有様をも想像せしめ、作者の無爲恬澹を樂んで世外に超然たる有様をも想像せしむ。然れども此句が與ふる印象は極めて不明瞭なるを免れず。僅に池と月とを現すといへども其池が山間に在るか郊外に在るか庭前に在るかも分らず。其池の大きさも知るべからず。其池の形も亦知るべからず。况して池の周圍及び池の面等の有様は毫も之を知るを

得ざるなり。

強き勢力を含んで餘韻ある句は

猪も とも に 吹 かる 野 分 かな 芭 蕉

の如し。勢力強き句は空間の變動を現す者なれば自ら空間と時間とを含む。此句は暴風が廣き空間、野とも言はず山とも言はず荒れに荒れてあらゆる物皆吹き飛ばさるゝが如き感じを起さしむるに足るも、明瞭なる印象をば起さざるなり。以上の句が總て印象不明瞭なると同じく、以上の句に反對したる句は印象明瞭なり。

之を要するに餘韻ある句は讀者の聯想に待ちて句の面に現し盡さず。印象明瞭なる句は句の面に現し盡して續者の聯想に待たず。之を實際に見るも、茫漠たる山野の大觀を一望の中に收めんとすれば印象の不明瞭を來たし、方一尺の函庭は明瞭なる光景を腦裡に印記す。况んや同じ十七字の區域に於て大觀と小景とを現さ

んとすれば大觀の不明瞭にして小景の明瞭なるは然るべき事なり。故に餘韻と印象明瞭とは兩立せずといふなり。若し餘韻に對する吾人の解釋に満足せざる者あらば吾人は改めて左の如くいふべし。曰く前に述ぶるが如く印象明瞭といふ事と兩立せざる所の者を假に名づけて餘韻といふと。

餘韻多き句も佳なり。印象明瞭なる句も佳なり。吾人は兩者の優劣を判せずして、孰れにもせよ出來得るだけに含み得、現し得たる者を佳とせん。之を數量によりて言はんに假に俳句の全量を十とし、芭蕉の夏草の句は十の餘韻を含む者とし碧梧桐の椿の句は十の印象を含む者とせんか、吾人は其優劣を言はず寧ろ共に佳なりと言はん。其外、餘韻五と印象五とを併せ得たる者も佳とせん。餘韻三と印象七とを併せ得たる者をも佳とせん。併せて十の全量に滿つる者は總て之を佳とせん。之を表に示せば

餘韻	0+10
10=	1+9
10=	2+8
10=	3+7
10=	4+6
10=	5+5
10=	6+4
10=	7+3
10=	8+2
10=	9+1
10=	10=0

の如き皆佳なる者なり。十に満たざる者は満たざる分量だけ之に劣る句なり。(假に美の標準を餘韻と印象との二種と定めて言ふ) 或人又曰く

あら海や 佐渡に 横たふ 天の川 芭蕉

の句の如きは餘韻ありて印象明瞭なる者に非ずやと。答へて曰く此句を夏草の句に比せんに餘韻は彼よりも少く印象は彼よりも明なり。されども之を前に擧げたる碧梧桐の句等に比するに印象明瞭の度は遙に劣れり。此句を熟讀し又は此句の由來を知る人は初より種々の印象を起すといへども亦は自己の妄想より來る者にして此句が現す者に非ず。姑く虚心平氣に歸り始めて此句許りを讀む者として考へよ。而して後此句の印象不明瞭なる點を知るべし。佐渡の遠近、佐渡の形狀を初

め此句中の全景は漸く考へ漸く現るゝ者たして、決して一目瞭然に一朶の花を觀、一羽の鳥を觀るが如く眼に現じ來るに非ざるなり。此句の妙味は此大觀茫漠たる處に在りといへど印象の點より言ば猶ほ缺くる所ありと言はざるを得ず。吾人は此句を數量に當てんに餘韻五と印象五とを併せ得たる程の者ならんと信ず。若し此種の句をのみ喜ぶ人あらば其人の標準は餘韻印象相半する邊に存する者か。又餘韻を主張する人の説を見るも其佳とする處は凡そ餘韻五迄の間に在るが如し。吾人の佳とする區域は之に倍す。

印象の點は大略論じ盡せり。是れより更らに他の點に移るべし。

(九)

明治二十九年の特色として見るべきものゝ中に虛子の時間的俳句なる者あり。例へば

しぐれんとして日晴れ庭に鴈來鳴く 虛子

窓の灯にしたひよりつ拂ふ下駄の雪 虚 子

の如き又

盗んだる案山子の笠に雨急なり 同

住まばやと思ふ廢寺に月を見つ 同

の如きものなり。前者の時間は現在にして後者の時間は過去及び未來なり。現在は短くして過去未來は長し前者の如く現在の時間の接續する者を假に名づけて客觀的時間と謂ひ、後者の如く過去又は未來の時間を以て現在と連接せしむる者を假に名づけて主觀的時間と謂ふ。即ち「盗んだる」と言ひ「住まばや」と言ふは主觀的時間なり。

文學元と時間的なるに拘らず俳句の空間的に傾くことは已に言へり。されども多少の時間を含みたる句は古來其例に乏しからず。

上り帆の淡路はなれぬ汐干かな 去 來

薄曇り同じ空にて日の永き 白 雄

といへるが如きは客觀的時間を現してしかも時間長き者なり。然れども此句には活動即ち空間の變動無し。

名月や池をめぐりてよもすがら 芭 蕉

永き日や大佛殿の普請聲 李 由

といへるが如きは客觀的時間を現して、しかも時間長く、しかも空間の變動あり。然れども其空間の變動たるや極めて緩漫にして且つ終始單調の變動なり。故に此の如き句は活動せる句よりも寧ろ靜止せる句（前に擧げたる去來白雄の二句の如き）と同じやうなる感を起さしむ。

應々といへど叩くや雪の門 去 來

をちこちくと打つ砧かな 蕪 村

舞ひすくむ虻や地にそふ影久し 白 雄

といへるが如きは客觀的時間を現してしかも活動あり然れども其活動たる單調の變動に過ぎず。

靜止せる者は時間長く活動せる者は時間短し。或は實際の時間に差異なき時も人は猶ほしか感ず。故に後に挙げたる去來蕪村白雄の句が前に挙げたる去來白雄の句に比して時間の短きは固より其所なり。

虚子の客觀的時間を現したる句は上に挙げたる古句に比して遙に複雑なる變動を現したり。是れ虚子の句が古人以外に在りて時間に於ける一種の特色を成したる所なり。

虚子の句が現す客觀的時間の長さを言はゞ初に挙げたる去來白雄芭蕉李由の句よりも短く後に挙げたる去來蕪村白雄の句よりも稍長きか又は同じ位なり。

主觀的時間を現したる古句には

永き日のつもりて遠き昔かな 蕪村

日歸りの兀山越ゆる暑さかな 同

右過去

來年は來年はとて暮れにけり 露川

氷踏む猫や行くく戀ひ死なん 白雄

右未來

の如きあれどもいづれも事物の上に變化なし。即ち現在の事と同じき過去の事又は現在の事と同じき未來の事に推及したるに過ぎず。作者が日永の時に居て今の日永と同じやうな長時間が積んで昔となりしよと思ひ今越えつゝある兀山を今朝も越えけるよと想ふ迄なり。露川の句の來年はと言ひ白雄の句の死なんと言ふは全く現在の事實にはあらざれども現在の事實と表裏を爲すか又は現在の事實の結果として在り得べき事を言ひたるに止まれり。

虚子の主觀的時間を現したる句は此等の句と異なり。現在の事と同じ過去未來

の事を言ふにもあらず將た現在の事の原因結果として來るべき必然の事又は普通あり得べき事を言ふにもあらず。却て現在の事よりしては讀者が想像し得ざる程の無關係なる事(天然的に無關係なるを言ふ)を擧げ來りて(偶然的なる)特種の關係を附けたるなり。雨中に笠着たる人を見て誰か其笠を案山子の笠なりと想像せんや、而して虚子はこゝに此特別の場合を取り來りしなり。廢寺の月を見る人をして誰か此人が此寺の未來の住持なるべきを想はん、而して虚子は此特別の場合を取り來りしなり。是れ虚子の句が古人以外に新機軸を出だしたる處なり。時間的の俳句を作るは難きに虚子が此等の句を作りしは難中の難を爲したるなり。故に此點に於ける虚子の名譽は難中の難を爲したる處に在り。然れども難中の難といふことを裏面より言へば無理を爲したりと云ふが如き者にして俳句の短所を出来るだけ巧に成したるなり。故に虚子集中を見るも此種の句は極めて少く又此後も多かるまじと信ず。

(十)

虚子が主觀的時間の俳句に於て古人以外に新機軸を出だしたりと言ひしは蕪村の句を忘れんとしたるなり。

蕪村の句に曰く

御手討の夫婦なりしを更衣 蕪村
打ちはたす梵論つれ立ちて夏野かな 同

前者は過去にして後者は未來なり。虚子の句は實に此二句に本づきしこと明なり。若し微細に其區別を見れば過去の句は虚子に在りては「盗んだる」の五字を用る蕪村に在りては「御手討の夫婦なりしを」の十二字を用う。是れ第一に、蕪村のは過去の事物複雑にして、虚子のは比較的簡單なるが故なり。第二に、蕪村のは現在の更衣と直接には何等の緣故も無き御手討といふ往事を捻出し、虚子のは現在の笠に關係したる過去の來歴を言へるが故なり。第三に、蕪村のは夫婦の更衣な

れども其夫婦の字句は法上過去の部に入れて現在には省きたり。虚子のは案山子の笠を盗みたる者なれども案山子の笠は句法上現在の部に入れて過去には省きたり。是れ第二の相異より来る者にして虚子のは句法の奇を以て勝れりといへども終に自然ならず。案山子の笠とは特別の笠の種類にあらずして案山子の被りたる笠といふに過ぎざれば、人の之を被りたる後に猶ほ之を案山子の笠といふは稍々穢ならず。

われぬべき年もありしを古火桶 蕪村

と言へるは過去現在の関係、虚子の句に似たれども趣向極めて單純なれば斯く安らかにのびやかに言ひ得たるなり。又

獺を打ちし翁もさそふ田植かな 蕪村

の句は「獺を打ちし」と短く過去の事を言ひたる處虚子の句に似て、事物上の關係直接ならざる處更衣の句に似たり。而して此句の過去と現在との關係、案山子の

笠の如く剽切ならず、又獺を打つこと、田植との配合上の趣味は御手討と更衣との配合上の趣味深きが如くならず。此を以て此句の初六は餘り全體に利かぬ様に感ぜらる。开は兎に角、御手討と言ひ、獺を打ちしと云ふが如き過去の事件を擧げ來りて俳句の趣向の一部とせしもの蕪村を以て嚆矢となすのみならず、蕪村以後にも多く之を見ず。

落馬せし去年の山路の霞かな 乙二

の如きは極めて稀なり。

夕顔やあるじを問へば鉢叩可風

の如き句は時々見ることあれど、こは過去の鉢叩の瓢叩く有様を感ぜしめずして、寧ろ抽象的の鉢叩と呼ぶる、人を知識上に思はしむるのみ。是れ句法の然らしむる者にして蕪村の句と同一に論ずべからず。

又蕪村の「打ちはたす梵論つれ立ちて」の句は「打ちはたす」の五字に未來を含めて